

911.3  
Y"

全

卷之二

古樂府

者

書名

題光

正

毛文山詩集

毛文山

毛文山

毛文山

毛文山

毛文山詩集

毛文山

毛文山

毛文山

毛文山

毛文山

増山井四季之詞

春

青陽 青帝 陽春 蓼天 東君



正日

むつまちうち日益玉初日正月日正月かきとてお日正月いと日正月上陽

至若大簇端月玉春之月正月卯日正月卯日正月夏正正月

卯日正月

正日ハ就跡ゆゑむつまちうむつこりともごうぐでねを畠正月てもつに  
とひう立春正月後正月十日雨水の節の和昏子斗柄寅正月方正月故子正月の日ともりて寅正月の正日正月とて夏正正月と正月  
十二律の大簇正月准れハ大簇正月と正月

元日

この年た年始正月より年終正月と正月の年をもつて

かうま年一月一日 朝之年 上日 年以 雜旦聖節 改旦

歳且 年のうち時のうち月のうちあれハ三始三え元ニシテモ  
シテ 稲の相自の始 日の始れハニの始一たとへりよ

四方拜 星をもふ付 やほけ 櫻

五 月 元正の寅の辰をもくき属星をもくして地四方乃山陵を  
事一終よて年災を拂ひ宝祿を祈りヨリミキテ伊豆公本根添

於は次第玉奉 王星をもくよるとノ年中行事の吉凶よりもく  
歲辛の星奉命星をもくセ逐つゝもく候ふるやとシテ今  
在處の俗星佛とておふすももくもくう

萬固

ハ ガタタ  
モモカス 菓饼桃 大根大根もく日ゆつア茶 うすいろ桃

萬聚日 ももこ茶

世謡曰善云をうちとひてもとの義よりハいぢうなむ  
若人ハ萬をもて命令とひるあ萬が主をもとひともとひ  
萬固ハももひをもむらそと主の義後ももひをもすと  
ももひハ清ケ酒を松まめよりもひの酒をりふとて  
ももひのふまもひの酒をつくりてつくりてと一石をかることと  
ふき一石玉茶をもく茶ハももひをもとひとひとひと  
ももひとひとひとひとひとひとひとひとひとひと  
ももひとひとひとひとひとひとひとひとひとひと  
ももひとひとひとひとひとひとひとひとひとひと  
ももひとひとひとひとひとひとひとひとひとひと

唐樂を供そ

年子 屢蘿 白散 度瘴散

しらてぬぞそあつまト公車根添をもとひとひとひと  
天官屠蘿をき丁やまよまつまよとて小也をそそりての万

主をやつと年中行なふべし合もあきハ山比他皆うどく  
サヒタニのアリのヤドモアシテハ親と一軒ノ居候二軒ノ白敷

三脚ノ度齊教とアリ

椒柏酒 セウハツシヨウ 半文 椒酒 日 椒觴 言

ありと元日ニ用ひ一車文粧樂と山椒の酒也

朝袞 胡拜 奏袞 奏瑞 付小社也

袞が奏瑞附也アリテ元日ニ御天子を敬一門也  
トモヤ奏袞奏瑞も以附也アリトモ小胡拜ハ祭也を異也也  
ソドモ一年中行事ナ合ひよけアリね夜ハ更衣トシテ根也  
ソドモ小祭也ハシテ厨上アリちうとニ事根除ニシ

元日祭會 諸司類 七曜 セウヤク 氷模 ハラカ 脍赤 クス 國柄類 全年

七曜は暦と八日日大水木金土の七曜をちりてあるもの暦之冰模と六  
季年冰室よりとさかう氷の厚さを考みてここからよ奏ーてそれ  
よりして石瓦の上にとてまつとも 脍赤の弊ハ弊ヒと云候と  
ソドモとて翁矣もアリ 諸司類とそ元日節余のつめてもよきと  
タリヨセアリトモアリ 諸司類とそ元日節余のつめてもよきと  
又國柄類とそ翁ヒとシ翁ヒを吹きりも此節多よめり慈神  
モトモ古跡多よ行幸の時國柄人ありて一夜宿をしてまつり欣  
興アリヒトモ後も常よ來ねーりとまひひともス事根除  
院拜礼 一日 院系の人とほの間所にてお礼をすとモ 拾芥抄

祇園をつづりけり計事 拂 元日寅刻

元日の寅ノ一天よ祇園をひね殿にて松の木をつづりけヨ新支火を

きて大ふく雜煮のあよむるる 一祝大晦日とづるハ水

年達乃神 佛 え方棚 日

婆利賽女ハリサイナの神をそ方よりひて就き雜煮ハシムとゆふる

毘沙門のくじく經 佛

ア夷 日 元日は豪華カマクラと實ミツをきめていそひあつてやう

門の神棚 日 在ああ事アシタシよ棚をうまへて神をあすぶハラウテ

符フをそらへけり

門松 こそ松 佛 かさう松 日 かさう竹 日

晴咱ヒナガ簾内マツナカは胡且將來コシヤクルメ、塚ツブのちチをもとふとあれと世セ繕ハシメ、  
向モチ若松ハナシキをちきう竹ハシケ、其葉ハナを焚ハシメねられ八年燃ハシメ、  
祝ハシメハ御ミそト一束ハシメ禪チム圓エンのまほ作ハシメすと

かさうらも 佛 クタリコロ 日 大きう日 うきうの炭 日 蓋蓋カバヤアリ

土佐日紀モントツノキのうあちうアチウあちうアチウととけりこれコレをもとて神社カミマを  
あちうアチウらもととく六門ロクモンイシタリシタリてハ居アリようヨウニ

かけ網 佛 伊斐海老イビカニ日

井水 つい井ツイイ井ツイ井水 井水桶 佛

モントツノキ

アシカヤ

古年は生氣アヒの方の井ツイを琴ツイて蓋カバを琴ツイて人ヒを汲ハシメたてて立春の  
日主水司モントツノキ肉裏モトツヅキをまつせハ船ボウ前マサニてことをきこてあも年中の  
船ボウを除ハシメくといふ主文マサニゆうマサニと年中行事ハシメすと  
之シテをつと井ツイ井ツイともりふとものそーりよくらハ井水ツイイ水ツイと云  
うや又せ瓶ボウの差ツイ云ツイくとも山日サンヒハ井水ツイイ水ツイとてあらう

主家より年男といふもの元日は天井の水を汲一を以て  
とて水をとみよとて身に付へりとすがまにてハ立事の  
よりさればそぞうては若をとせむ一是真法徳也  
速教は差水元日とひとと俳偕みふ身も

大ぶく 俳 元日はおよこむてる差や大福といひておる  
あ餅 俳 三十日おつまむる餅を餅夢とおゆき  
難煮いも 日 えきもふ日いづの日むすびふ日ひま牛房日  
ひまわ日ふと一 日あまの日小なせ  
き芋からす 日 うれ日かをあとまのそ田つむす御ひだら  
いもくわさかやくち栗ナ柿椒やしもやとい

袖 アシ 枝子拂うさり跡老勢ふくもひきとハ元日  
ぬくま 俳 生海藻をす アシ わき アシ 土佐日記す元日す  
に次第も元日押船一杯とアシ船ハ年束とて年始と用ひ  
年男 俳 おうまと日ふくらとめ日ふくらとめ袖  
とくまよあひ アシ 年玉 日 年始のわく記ねをアシ  
袂 アシ 俳 袖きて日ふく 日 玉 アシ 万ばよむきとつとふもこと  
袖中村ユリ アシ これ美帝のやうに虫あう眼のひきを  
准 アシ とアシ 社中村井出屋四番  
あひつゝ 俳 まじまじまひ日すか月 ユキ 胡鬼の子日胡鬼板日をりく  
、と蚊よくまきまくまひとアシ秋の蜻蛉蚊をくすものひり

破魔弓 日 破魔矢 日 そろそろと怖をまわしてうのちえ  
みてこれか射てまひよ筋負をひもひもすこめぐらひめのと  
おのまほひすや ちうひも日 魔ひに口渴脛すくめ日  
うそめ日 ちゆらとくめ日 魔ひに口渴脣すくめ日  
きをもーわ日 きぬまをむらむとくめの内舌を探でるも  
或後みハ麿始みて舟へもうすてあくあはるりともう  
三つねの連歌 日 傀谐 敷氣 初音 元於の舞のまつ

袖裏 えりのねりとまく 扉ひき 松そや 傀

去年 今年 あととくとひの年 傀 あまとく

筆詠る まよ船 お書き日 林毫日 うすひそわ 日

千壽萬葉 乃葉不走踏テ筆のみひととすまよ枝拂ふ

唐物 いまとひらくとて筆をと あさ

日

かうう 日 元日よりあとせ仕事いつひらくへまく ひよつも 日

ひよつも 日 五日の宿起をとく せも振迎 日 水け税 日

けまう文素 日 桃符 桧榎桃梗仙木まき櫻墨

け茶

是ハミタニのうちモテ木の本づれは作茶葉墨の二種の形を経て

きて元日子門よりもへ思を防ぐ事一竹すれを桃符とも櫻梗

とも櫻榎仙木ともうすく車文

畫鶴貼戸

鶴素

元日ひよつも

毛もかく聞よみうらの鶴を門戸の上にねえもよす戸の内もと  
け札をとくよはへ百色祭とて生茶附記ふと

此願

もくよみうら高人清胡毛よ此れとくよせをもゆふ

彼高人かくまやあれハ必殺をとへ一又元珍よめをなぐる記  
やうりとて高人近かけしハ糞壌の中より入てモ後アシモ

ちよすすすねよ後人元日よひそ縄子人形をうけて糞の中より  
ちげて令めれとりふすりをさす 本文

アシハイトハ  
糞灰を起す 三春の日草の葉の灰を律の端よりかけハ  
あめぬつる時を灰おつらむとも 本文

春盤 生菜 セナリ きわみの李邪とりふ人大根芥らうを糞

盤とて三月の日わ縁どふ是をうちらモーとちうて春  
綠生菜を春盤と号そとす 本文

糞巻サインをつくる 緑巻とも

是も糞巻を以て名づくとて三月の日つくるとて 本時記

神武日 三月のあそひ小松引三月の松 神武まほのむちえ

足ハ糞巻糞よおねのテうちよは玉弔とハ若骨カツとりふ糞よ小松を

取て五月神子日ごくひまう金とそぞそむくすりと神中村ミタニスニア

若菜 神武ゑさうそしきれそとす 芹薺セノリ うなま ごまよう

モーろくまね体コト菜つむび葉エバ葉エバ糞 千代水菜チダシネ菜ネ葉エバ糞

とくまール せきれそとす

首ハ若菜と上の三月の肉蘿蔴クラレウ希肉膳司ヒムツシ禁中よせよせよと

或ハ十三特付トツブもくすりもくすりス卦カジ卦カジシテモヤシハ苔

蕨ケ葵ケイ莖ケイ葉ケイも育カクハ左處シラフ七日よ板バンシテモシテモくわ多タダを経ヨリハ

経ヨリ三月の空スカイセラシモキモとてくわれを盤バンよのせて糞生バン乃  
名メイ日本ニホンの空スカイセラシモキモとてくわれを盤バンよのせて糞生バン乃

神寅と年飯ふと柳うへ日

上の寅が日御事より事ありてまうとく不酒はふくよ膳石をいれて  
上と人わざ縁までひげて奉るをふと柳うとアニモテ

フタキ

シテ石のまつて楊宴

ノカモリ

二百弦指行之

柳杖

柳杖

正月上のや日ノ木の木立を五尺三寸つよ

切て二束ニ半よりひて茎とけよ木を柳杖とひしハ公事

相原子とほ氏持持とハヤツトとシ柳とおもてりあつ

年中の栗恩を度て急所より内裏よりあるゆどと先定致  
ひ候く今のが義が義をすか持とて左家より柳ハ一尺

あまの柳ウラムキのうをもみて俱利伽羅新竹  
木のよびと柳うはかゆてれま子ユケ林のカマーとふる  
二十大饗食 ニ日ニニまとい東あ中あり事も王位下ニあ  
トキテお礼とて簽すくとモトモト相原

柳観行幸

ニ日ニ是ハ天子の年始より上を英母后のあみ行幸

アラリヒシモヤ相原柳観の宇礼がよき

柳

対空

ニ日ニ色ハ松改園白蘿子車の駕大門下の上をアを

折まそせんねぶりのふと一定ヨリヤム村てもあらねハ行

府のまとと一年中行事

西氏ゆ連はんじんとありとありと  
天子も易指すをうふとア

三人も易指すをうふとア

三ヶ日 うらいろの速歎 二月より

あくまく 千瘡万病膏 延喜式

元旦は末ハ三ヶ日まで一月にてすと三月六日よりてかそ  
まつまつ折足よひをめりをまちや筋よつては額并脚耳方  
うみけよひを奉本紙はくまくとくがくくへ膏葉まくせ  
まつまつ折足よひを奉本紙はくまくとくがくくへ膏葉まくせ  
まつまつ折足よひを奉本紙はくまくとくがくくへ膏葉まくせ

松の内 世詰 三月九日改めは三月

世詰四月

履鷹之至 元旦よりをがまく御用 吉言板事

覆新之至 旦も正旦はまますてくまかまく御用 吉言  
叙位 五日或六日然臣の年嵩を奏一傳を汝下ヨウシタニ 叙す  
白鳥萬會 七日おもむくせり 白鳥の奏白 あおむくせり

とつゆりはまよは唐のりを取ハとて正月一日ちをとひてしむ  
壬午の邪氣を去とし本文をやねよせりよて天よりは寳  
物よりとよきの吉をす無神者ヒツク そ生つゝはるの奏  
とりふりと天皇の貝多角紫ヒタチシロ はち長さ七尺五寸五分セ尺  
五寸五分セ 三事板原

正月一日 世詰 のせよハキをる日とぞろそろのちつよのちく申  
候トモテ 菊楚歲時記も正月七日俗に絆の葉を奉じて之ハ  
まつ人万病よーと仰る也 人日 吉日 蓬辰 書言

人を帳下貼フク 申文 正月一日を籍と一二日ハ猶三日ハ猶四日ハ年  
五日ハ牛六日ハ馬七月ハ人日とりともんハおぬの靈うち及垂辰を  
シテ一月子弱を門るゑくまきふを唐うへ人を帳下貼トモテ

菜摘川、件事 七日左せうての申件事より

寺齋會 八日大極至モナ廿日までセテ日辰勝王經を講せシモテ

物もそいのトドケルべる事相原

主の言定、法修法 八日宿直人 徒法學

是もきよナセ日の間行セテ今年金別異られハ明年ハ胎教  
異年シヨガタシ修モラニ月のほ修法とハレリシ高シ後ハ

禁中子也

太元師法 八日詔於者ヨテセ日之内を終シスキ 持ノ室ヲヨニス

女叙位 八日女之位階を叙セリソテゆく内侍司の被也ナ  
東宮子とて松葉馬上引者わのひちヨウシキミヒラニ也  
シシハニツコを用ラリとテエニ五ハ天子のちもセ然も管

ノ又毎年ト文をアリテ五位のうちめを綴シトモ育ス

紀行季相とは一氣をおけシムニ

女王祿を綴シ、四月奉役解免シと承御門のうち幄のセシモサ

王子御を綴スヨリ、スヨリ女王祿のサノミヨニサル

常陸守乃件事 十日吉テ彦國麻達用作の祭の日セリケン

あまくち内を男の文とモを布の弟ヨキチウテ作アリ  
おくよを介ヨウシテアリサセモアリテメアケ事のやうニシテ  
至れモチテ常のやうの男と取ルキナリミセキ名所

夷祭 十日西のままで行カ今日大祭の今まの美めヤ、ろとも

人ノ身ノ付シケル

縣石の除日 土日シナリナ三日生て二日目シモアミハ余あリ

不囲の人をもって任すを抜けられへやうとあはれふを禁固乃  
是文経をほせらるるとくさりの下文を下板原と云

トシ森金の内海候ナ西日本板屋の松竹と通居する者  
達竹とひあそて通事と云ひ御手口と云

男踏候ナ毎日の夜しおれにてまつての間へうらゆ

錦と毛車と板竹とひあそびの間とを修り踏手の  
毛車と毛竹とが踏すハ毎日の夜しおれ半日と云の  
お車と毛竹とが踏すハ毎日の夜しおれ半日と云の  
毛車と毛竹とが踏すハ車中の男女の車とくさうふをわ  
けとて年始の旅宿をつくりて車をあせらとせしと  
竹とよ確すと、ハヤとそおお付ハ和テをうてし或付ハ  
時とよひとよもよほ氏ゆ修すハ行川を

タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ  
タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ  
踏すとよ細々かべりかくすり車文とせ但十五日と  
踏すとよ細々かべりかくすり車文とせ但十五日と

ナ本日年越せ候縁申付大船を合て旅宿付て吉とを知  
三種打付左と長爆竹<sup>サキテラ</sup>とさんとせ候吉とあくびと  
かくに左鍵打ハまよ皮とちくら鍵打と伏見苑子牛と

伏見あくびとつぶと一伏御あるべえとすは成船の心アセと  
をもととととととととととととととととととととととと  
ととあつて旅をつけるをみつめてうとよかとよか  
伏見出とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ  
とよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ

分の後も野槌と爆竹はともアモ山脈とツヅルの人を  
た一ちやまきをおどもあらうて仕りを元日のあよ木一文

お寝みハナスロタ内吉みハナル日わらひ

かまくみハナスロタ内吉みハナル日わらひ

上元

日

十五日これに面をとくく筋をとそもうて三内省ニ  
ほき

をまくみとくとくとく

かの木 同日 うゆつも うんざりあらうとそ牛の筋をチ樹に  
さしておれうすものハ筋をとくとくとくとくとくとく  
本とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
りふねみて人をあらりこむ

小豆粥レバいも小

豆

粒を除くと二ア五升

卒母ランの味粥

日

同日に内閣卒母ランの味あす粥をとて年中の田畠の  
吉凶を相まうと

獅子カシの件事

日

大首修筋が山里あると一ナ宵ナ首ナ日大  
ざい松をにらふり、うと五升

腊ユニ 十八日そハ天子う場多すてそをひ質をすとたむ迎東左

右考陽世府の金人とも内村仰アリケシとひ罰金をかこう  
侍の方より年子を差モ太い邊境の差しれ、ま事で乃ち  
大将村より食を綴よ、れをうアフーとくとく

巨ヒ 無アリ 俳

十九日

義民將來

えハハ株の定筋のまよ

まうてくさん將軍のれをもみてゆる。秋代は牛ひ天王  
兵の精をもひいてめ、五歳かく災難を免へーと極ひ  
おつね兵将をもみよれをうけむる。厄神ハ牛以天王

アーチ

県足の義

假

二十日を三の晦をうらむえ日。今廿一日

二十日 もんじ

同

廿九日をう日を六日正月とし

庚午を聚

同

天霧

もう一に東め俗言廿九日の義

庚午をねあて屋の上よおう。もと天霧とハシト。又給を祀

伊都山鷲祭

同

下亥日官幣を近代所祭。松枝

御真

廿一日

性壽殿を行ひ文人道を得。詩を詠て其弟三

七日をうと

同

吉田清假

假

十九日 壬午日

外記の政始

吉日をもふか起ハ恒例行付の日をう行。吉日を年

自ノもあ年のはを行ひ始む

情忌

能廿五日清御上人の忌日。とす日を年をもと七日納骨處をほら

福壽

モニ。元日冬至ともうテ元日も不候。と

東北ももくと

水立。水立ちこやのい方。わしてくる。但水立ももくと

水立

水立。水立。水立。水立。水立。水立。水立。水立。

水立

水立。水立。水立。水立。水立。水立。水立。水立。

水立

水立。水立。水立。水立。水立。水立。水立。水立。

水立

水立。水立。水立。水立。水立。水立。水立。水立。

雨水

節。雨水。雨水。雨水。雨水。雨水。雨水。雨水。

木の芽

木の芽。木の芽。木の芽。木の芽。木の芽。木の芽。

雨水

木の芽。木の芽。木の芽。木の芽。木の芽。木の芽。

くらむ

水菜花

日

盈海藻二十石ある。かす雨水等の二候より

或に葉のも三日とアリてゐる。莖をくわらと較べ、之

水菜

水

水菜

日

根白草

根白草

日

細子似うとつすりし 座の座をひめぬれも毛 織り下む

毛ふよぢに坐ハメトモモウタモウシモヒトスル

モセ 山根乃皮 節巻きまわる 百千千

毛のふ あまこ 備えのまき

底乃御 毛も眞面云仙徒をりて院の清所をまわる

二月 さくらえ 樹又月桂玉小ま生月 日仲春 夾疋 ぬ白

令月 閏牛 正月のとちちやーをけ月さんアテ衣をとお

きまふそそくらまとひづくし葵義村を帝ハ太皞とみ神ハ

匂芒体夾疋よちとくとく 半文

牛糸歸 二月一日 乾蟄節 二月ノ神氣也

初年 祈の年日ウラユキアリテ 束縛せんじテ 因日御

水間寺初年祐 和泉國ニキニ紀世ちとくや 奉物ち業 初年を仕

越生子

毛うテニ二月一日子未た袋子百穀瓜李あ菓種をへて三子を

釋年奠

秋菜 二月の上テ丁の日大學寮ニそれ子第十哲の教父エアモ

リモ 礼起の王制子菜を秋幣と奠て先師を祀もととゆかモ

秋奠とも秋菜ともアフ訓みハをもがつてとせひととモ年中ニ

二月八日あまおとモ秋奠といふ事も

春日祭 上ノ申日先未ノ日を祭ナサ將勒供奉の日ハ内侍

而ふ坐車イタシ上歸矣も今日向ふとス

大原野祭 上ノ卯日大原野春日祭と同一とモ先も春日明神也

祈年祭 四日左神主以下三千百社ニモの神を祀ナケンをあはせ

経は毎年といのノを行ふべし

祇園祭ハ舞八日於葵野子

列見 土日公々舞が助と起史と村上あさうにてを改支して

行をもとてお供は侍已下の花車等をものを携て或ア葵の二省ぐ

ひまてあるを上りて一そまて是を客儀をアシム列見と  
ウトセス

吉原の舞ノモト 例二月一日説人ノリノモト  
ヒトコト

比良のハ露 例とは比良里と行く

萬の能 例あわすカラセリナリナ日まで二日半のあとうひ

毎日よりを及ナレ私をあらねをあらゆるを一日ナリあらとく  
遺古經 佛涅槃入終そんとせ此經を伝持つて世後四章より  
九日又ナ五日北壁御迦坐とせ此經を刻漢ー御迦の名号を

佛乃別 二月のぶれナリノレ佛涅槃像佛涅槃表ノ吉の日  
傳燈柱炬 例十五日與福ち。事ア玉矣 日日於葵野

模塔 十六日或い石塔とナリ。其の事ニ

春分節 二月の中ノ勝月夜

社日 村のあは

近主成日或之の後五日は日も是をもて五穀の神を祭る  
日とも言ふ事ニテ。つては社日ナリ。ソム

活耳湯

社日湯との如ハ耳をもとほするところ。海縫津事より

社菖蒲

社の水菖蒲を含むる故社日湯ハ少雨をアラモツ社菖蒲

水と水土をチケツな子社よりもアホを植て社主トナリ。夏ハ

松殿ヲハ柏周ヲハ栗と稱被ニ在王者五色の土を封一て社ト  
候を述と禹貢注は也

國家ち、家勝矣。十九日立、五ヶ日延久五年、玉始之、於赤沙  
天王ち、聖靈舍。廿二日至、皆子の唐昌日、天王もて、是日  
也、徒日伶人、年也。

北野みほ、忌日。廿五日天佛て秋の日忌也、ハ吉祥也。モハ禱  
也、吉事也、祭也、人し行ふ、也。

季後簇經、或三月中、あまそ大般若行ひ祭也。

二日癸未、固出うそノ日也。うの二八月あまそモ一毛乃  
軒季をもううす、後どつあまそて祭也。

彼峯、日時正。これも東山の彼峯の祭也。寺幸て、乃所

臺子樹也。二月子不雨まで、七日七夜、て落成ハリ。又、梵  
天帝歎美也。聚りて、千百夫の七日、経世の若人、更への名を  
あらざり、故に、彼峯セヨの名也。又、をほきうと、松樹寺の祀也。  
くちと穴を出る。鷹化して鷹とも。日今

鷹尾の鷹、白尾の鷹。奥歴云、首政形も、毛鷹の尾と鷹の尾  
あくたとて、毛鷹を鷹へとす。毛鷹色の尾と毛鷹とて、山へ  
ゆき、ゆき、ゆき、ゆき、

毛ち鷹、雜子、キ一野雜漢の呂原の婦を雜とアサヒ諱を

也。子を母也。鷹を母也。二十九日、山羽鷹、毛も、山へ

タケ子を母也。鷹を母也。二十九日、山羽鷹、毛も、山へ

身御云、毛も、山へ

雉のちくあをすかえ未申子ゆふてどもと呼む特大サミタチモ

鶏<sup>ツバメ</sup> つとくとモロシキニテヒトニテ此のちくわすみこをばく

燕<sup>ツバメ</sup> 玄鳥 つとくとモロシキニテヒトニテ此のちくわすみこをばく

アトリ 壬の名属 丁のふれゼ一ツアトリ トテナガをねじても來し

雪雀 ひとう雀 仙生雀の名を承りて來しヒトウヤシ雀

うそ 鳴琴引 二月毛日 雀の子日雀 蜂の巣 仙

蝶<sup>テフ</sup> お蝶 天蝶 仙蝶 月 おとものす日

蛙<sup>テフ</sup> 人<sup>ハ</sup>蛙 おと人の日 ひよの日 えの子日 井蛙 日

地虫出る しきくふみそゆ いとゆ、未生<sup>ハ</sup> 桃桑

猫に<sup>ハ</sup> 猫の妻毛日 きみのめ<sup>ハ</sup> 日

砂附<sup>ハ</sup> 附<sup>ハ</sup> 膝<sup>ハ</sup> 三月毛日

八重梅 紅梅 鮎中梅 仙梅 未梅日 楊梅 日

萬葉待

砂<sup>ハ</sup> 桑<sup>ハ</sup> 仙<sup>ハ</sup> 彼岸<sup>ハ</sup> 仙人<sup>ハ</sup> 月 未<sup>ハ</sup> 楊<sup>ハ</sup> 日

さくら日 絹櫻 玉櫻 ちう御櫻 仙櫻 三月<sup>ハ</sup> 櫻 日

ちくわ日 二階櫻 日つとく櫻 翁<sup>ハ</sup>のとよウ

貞由云櫻ハ難<sup>ハシロクミ</sup>しむをはひてハ事<sup>ハ</sup>と健<sup>ハ</sup>き不<sup>ハ</sup>ちくすもむのりあすハ事<sup>ハ</sup>

ほぎ木 仙代更 日 燒野<sup>ハ</sup> 山を燒<sup>ハ</sup> 茅を吃

燒野の木<sup>ハ</sup> 木<sup>ハ</sup>の房<sup>ハ</sup> 荻<sup>ハ</sup>を仙代

水口祭 貞由云苗代<sup>ハ</sup>水<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>水<sup>ハ</sup>ね<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>て石<sup>ハ</sup>手<sup>ハ</sup>し

絆角

麻<sup>ハ</sup>まく

うと 離

くそい

レリシ一

日

年うゑれ 土の年 杉葉

ム

防山

さあくつ乃 神中抄ミタマシ

あううえー

さのふゑ 菊のふゑ 菊のふゑ 萩のふゑ

あら紫

井戸

早蕨 金蕨 俗蕨 俗蕨 年日 実莖

相模守塚川西首アラ

アザミ

角ノササガニ 声錐 もんか 俗

アミコモ 日

筋 日をよ菊 日

首

川ちき日 次ちき日

海雲 日

いのや日

紙 おも日

鎌海菜云妻の那ハアドウのヤリ、妻の那ハキニトコトハナヘテカキモ

スルコトハナヘテカキモトコトハナヘテコトハ

三月

休生 三尺月 櫻月 売を一自

季春 仲姑 本文 姑洗 杉葉

病目 生シテ前後も莫のせ自休められやをひかといふ事を

己の因乃トシテ 上巳三日上の己日水をこそてモテて疫病をのぞ  
フミトモセ是因の代子ト一チリソードと魏ナリ後只二日之日を用て  
己日を祭リ トモ本文 朋詠源起周年思魏文トソニ足シ

須磨の法被 是の光源氏法广海ナ左近の時ニ前一日己の日陰陽師ニ  
かをきて之を以てアソブ人形を作りて流すナ彼妙作ナ  
曲水の宴 重を流すケラスのどよおシ 日本書紀

スルモモロコトシテナリナリニ首ハ王ニラヒコモテ詩をつく  
姫ナレタと名は溝水ニ正をうして文人墨を放すとニシテ

桃花の節 三日 桃の節 神事候日 神事候日 鶴合せ日 いつれ松日  
柳祭日 今日桃品を語りシテよりハ重病と除え 影失を語ま

本草十卷  
禁暗金滿といふ詩  
禁暗金滿といふ詩

句を上已のうち子ぬすうのねうても松を放し柳のううと  
うゆうや葉緑の音周王淫れとて猶良慈若一之松曲も宣う  
或人葉緑を愚王よまうと王モ味をめくる病えもうへ  
つまう是より政改りて世治アヒトハ節操アヒト

真法云禍合ハニ自ニ目モあら放事モ職トシテ行キトシモ

身後承幸ヒムカモモリモリハ神トテ御ノミタヒトシモ

自室清め帝モ御統モアヒトシモ支給ヘアハ宿坊を

加美ノ奉子五百人を勤て是モ御セテアリ奉文教署モ裁アリ

世義向吉モ今日是モ放フヨリは奴モト仰アリ終日之朱雀院

天子モ多ニ自空身モ御鶴十萬モナ空或起スベシアラ先師モ

修メ難とも寧れ御伊ハ季モおて御アリハハレアキヒモ性  
アリ得モアヒムカモモリモテハ教アリハはル御行スル元日モサムア  
御もひづれアヒムカモモリモテハ生徒トイ今日モカ行スル御アリ御御  
カヒトヒムカモモリモテハ俗モ仕モテ今日モアリモ御アリヤヒテ新  
経大疏波羅モウマリアヒテの仰

青鞋もともキの俗上已ニ士女忙戯もをふく又三月三日上踏

青鞋履とふす盧公范能能儀モアリ四機活法モ人日蜀人忙戯車  
青竹を北リモテマツリ三日莫ニ北山灵巖ちどみ高坐モアリ火を

アリて北辰子供モアリタクモアリ火は活法ニ北むすばをもみて  
アリ度モ毎ナリモアリ火は活法アリ火を

穿席ちの寂勝今七日此寺モ共モ空ウル所とモ毎年七ヶ日方務

王經を嘗みれどく

四

石は水に付る事 中年日南をとれど先中辰日誠永ち

年へ竹林の木とてせ枝をまつて仁壽殿の木とてすらあ

つまうて階に近傍の店人求子うひもあをあまきもとども

ありうるたほ已下うさのあを供奉人の所より一三脚五脚りう

まゆまうけのゆうは是に平の將門の付備は新ら毛筆をうけ

成るの報賽のよよ行ひあくとくとくや そり板ほ

ナレッハ 茶 是をむかふよ比度秋が茶とくとくやまほをもくをんとく  
御低友とぞまくればよとくとく

食食 え至らう夏日清相の手の三日をつとめに西省本山の日

どうぞいをもくとす今ふ推とくふ質人ちよやけうそー一日とて二日うそ

火を断とく魏武帝ハ北のを國ニ志ナのうとくまみの也とんとて  
を食をほをもくつ固率井州の刺史とゆう財主をゆ火をもて民の火を  
そとうるす權とての賢者の本をもよかーとて井州の民は却て温

含もくうるすりうとれとれとれとれもんとく候方を折りうとく

木の粥 を食ふ取し半鄰中紀子と 東一の篤 そくぬか

青精飯 事文青目飢飯大 おもを食ふ楊柳のせらをぬて絶とぬれにままで  
えらうもとくハ陽氣をすそく道あるく青精乾石乳とすくとくとく

も亂紙ともりとく

歎競乃戲也 羊飼すあれ是もを食ふ多くう邊を本アカナ

架を立て士女とよよ坐してそら縄を引うそーせらうふ、申一子

唐の天宝年中エミキを合す山歎競の戲をとくとく多ひ無ミタク

帝半仙の戯とあそまくと天宝遺本ノ有

全

清國乃節 三月の事にて 榆柳の火を燭ふ もハ食ひ

始火を引きを清國の節は榆柳の火を取て奉るに近きに燭ふ

よりて首をもとめよと書きが事うとよ出一車也

住吉乃済干佛 三日 土佐の海にて石立同日 済干ニ及ビ

石山祭同日

栗津祭同日

一垂手祭同日

立日同日

泉涌山開山忌同日

水尾祭同日

一雄法華會同日

十日

立日同日 ち尾ハ雄法華會をもととふつとをかくもととと  
ゆれど也同日 ち尾ハ雄法華會をもととふつとをかくもととと

ゆれど也同日 ち尾ハ雄法華會をもととふつとをかくもととと

礼拜禪佛

十二三月戲山於八王寺拜最行

比良祭佛 十五日

吉野乃吉式佛

十一日

祇園一切經會十五日

於林

壬寅念佛佛

十五日十六日 古心日立狂言至

猿捕取媚广 ちきひ紅湯ちとりよりち

初學寺佛

十五日 康保年中より大内紀美保胤往朝詔

とて文道先生の学徒をもとて二月八日二月より行ひ始二月

仰おほづ念於事之を一夜山門正田と紀南名の佑也もじえを朝詔

初學寺佛 三月の北生の西をみ雀アヒルをめぐらし若木の生アヒルをめぐらし

一にて二所へ近世四象アヒルをもくらす

嵯峨の大念佛十五日

狂言アヒル 千本念佛佛 うちの不生アヒル在

奈良祭佛 十八日

江戸

禮拜禪佛

十九日 弘法大師へ奉事られハ東寺よりすこち尾の秋篠寺

禮拜禪佛 二十日 弘法大師へ奉事されハ東寺よりすこち尾の秋篠寺

仁和二年正月

稻荷の山アヒル、廿年日落山アヒル

順の事は入 大事は入らずに 田園化と稱と云

月次  
清明後氣候

穀雨の節

三月半

キクサノイ

月令 穀雨節 亂候

水正日

壬午日

亥をもつ

麥熟

アヒハ

ヒヂミ

芳の草

やく草

春の防

春の草

草をばむ

草をばむ

草をばむ

草をばむ

カタマク

ニナ日

ハトミツの草

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

桃

べらくべへ傳れたのすて他とや 友とよ姫玉 ちくとくさの  
志水と年日是年日 二年

故様に人あら候様て様のちあむちに山極庄様も山よは  
をユ笑わづをあまのやうよもとつりあしもとちう

様ナハ様ちよのあひども桜田・様をかく極もふれ様ナハ

様をあひのちうるとも様の比侍もるゆともう

きうやつ垣う方やまきを山ぶんは帰ちうの尾うとのうハむる

様とく白いうとのくーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー  
スを構えイギリて候とつひとも毛くとく は年

若乃絆 おひき もろくを ものひえ 花乃鷺

花の浪 えひをえうするも そやよみのきみの湖へをこ

うふあひうそ 畠乃絆 ふけりも 畠多 ふまと候多

スとおととととととととととととととととととととととと

野乃笑

ふの良 ひの白い音

ふとむむり 野乃宿

リーン

野乃宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿

若國

不畠

若乃宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿

おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿

おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿

おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿 おの宿

お衣 お衣

ウノ伊 一毛四 おとこ おとこ おとこ おとこ おとこ おとこ おとこ おとこ おとこ

品瓶 ごりう あをへと多ちう

郵車 花名 ふせんぬ 乃は身日 ふうる ふうれいを乃ま  
ことうそ事すをうまうくせすふうれいが事心西モと

真ほ乃後てかにともあそきむらちひのむよらるままで

ま乃車 仙 まづくわ 日 まむきひのふの宣 ふえ西 仙

毛軍 仙

唐の長安の士女春分よ國元にて奇うるすかわまを

毛毛 仙 と毛毛とつひ天宝ま事すと毛軍とつひからゆう

毛延 五緒あるも多き毛延とつひの緒 ふ乃都

毛毛をあくに四緒の毛をつひにも毛毛の毛をひそひふぞと

真ほとす ま乃躍 仙 せととくもりうれい事と師役

毛く一 仙

毛毛毛毛 日 毛毛毛毛 日 それ乃縁 日

毛のや 王のや毛 日 毛守

梨花 らうの華ひつすり まゆ毛梨 みゆ梨毛うす

海棠 仙

まゆの葉やも まゆ夷 まゆ

躑躅 まゆ

まゆアリ まゆアリ まゆアリ まゆアリ まゆアリ

ほ山

ほ山アリ ほ山アリ 仙 ほ山のほー 日 まゆ山ふそ まゆ 日 ほ川 ほ川

山吹

まゆ毛 まゆ毛 まゆ毛 まゆ毛 まゆ毛 まゆ毛 まゆ毛

山吹

まゆとまゆ相承も まゆての山吹す まゆての山吹て まゆての山吹

本丸 仙

まゆりけ 仙 まゆりけ 仙 まゆりけ 仙 まゆりけ 仙 まゆりけ 仙

移木の木

まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木

庄内 仙

まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木

アシンドウ 仙

まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木

東 仙

まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木 まゆりけ 木

心の事 桐の花 日 あさ香 堂のまゝれ 青葉の花

物犯 朝ちこつも そふと空地 うつ文 日 春菊 日  
新茶 日 古茶のまゝかに茶つと 日 うみ茶 日 あつめく

かづらひ菊 日 馬蘭 日 又支

名前 日 金風花 日 けりん 日 桂茶 日 ぬくま せきま

丁子茶 日 背竹 日 一枝子思葉 美人葉もく

仙草茶 日 菊桔茶 日 ひづる 日 まつじゅうけ 日

三葉茶 日 三日茶 日 三日大根 日 やくしま 日  
あまつま 日 一挺二目と二目と二目と二目と二目と二目

五葉茶 日 三日茶 日 ひし山直脚茶 あまゆすとひゆす  
はくら木 美白茶 赤と桃花はくら 山吹茶 美白茶 美白茶

うら山吹 美白茶 日 ほし茶 美白茶 美白茶

夏 朱明 夏天

四月 朦月 朦の月 朦玉 得多朦月 日 朦拂ノ月 日 正陽ノ月 事言

己月 首夏 三夏 中呂 仲夏 余月 仰月 とす月 和の月 と

アラモトを里山とす 律中呂より中呂とも云う

ニ星カ一 更衣 一日 白雲 玉衣の叶をとと貞はひ

青羅扇 玉衣子白殿子かく おとせ 朝 ひよのひ 日

交組織 日 三水司始供狀 一日 延喜式

孟夏の旬 一日 扇を拂ふ 扇拂是の季 未央丸 未央丸 未央丸

清風をひひ改をきこすまき二款乃後扇をひひ拂ふ扇拂拂拂

ちふ供ひ子裔をくまくわみ香もモトて伊ニ送一て神武主事  
ちとと某時起手を、飛壇李用船 八月 山門より  
山邊祭 他 日日天王寺と童飯とツフ 多加賀祭 他 上巳迎は  
は尼ハ勝又小中ノ 幸安天神祭 年日を江前祭  
宇勢神衣カミイシ 大曾麻績連どく民人麻をうそを安和舟を纏て  
神舟ミタマをひふこス事

日吉祭 中申日山王ミヤクニシ 大官聖良子二宮八王子客人十擇師 三支

以上セ社神御輿船二車寄テ御供ミタマす

鶴峯祭 中西 甚形カツヒ あひ林 木うちアノ上御殿成に御下望成別雷  
古御の空アモリ 木をほ形め日とくまく木よ人ヒト 木柱キムラの木うちアノを  
くく故キセ儀ミタマすかく木よ人ヒト 木とツノモ山ヤマ木あす

中山祭 同 月立と冷水涼クヨウ おさまサマ 木御ミタマアノ

吉田祭 十子 吉田春日の事シキ 木幼ミタマ山落ミタマに建立一組了

圓白カクハの鶴峯カツヒ 請ミタマ中申主人ハ宗申にて地下及上人前駆ミタマは幣 唐桂カクナニ  
木わきわき琴カキツギ持ミタマ差笠カスガ添ミタマとツシ物モノを五供ミタマすテ東ヒタチケル永子

木御ミタマアノ木よ人ヒト 木御ミタマアノ木よ人ヒト 木

二枝祭 カイダ 木立辛川カツハタ祭ミタマとツシ木禁ミタマを御持ミタマアノ木よ人ヒト 木

仲御ミタマアノ木よ人ヒト 木御ミタマアノ木よ人ヒト 木

千國子 木 十六日三井寺ミツジ御子母神子童ミタマアノ木よ人ヒト 木

嵯峨祭 日 中主參ミタマ事シキ 向日御神祭 ムカヒ 中辰

久世祭 中已 清水地主祭 九日

當麻法事 ナセ 日中將船ミツボウの忌日之經ミツボウ供ミタマトミタマ也

土壤玄

十日

天王寺と

圓光寺

十七日

善人

中年

七日

花供 五月一日 大師の使者を取次く

神奈 五月一日

柳とう

梅天 五月一日 まことをもす

小箇節 七月一日

和清乃天 文選とて源氏文とて又清一月

青衣

柳

麥天 五月一日 小滿節の末也 青衣

柳

麦の秋也

麥天 五月一日 小滿節の末也 青衣

柳

柏うす 貞慶後もく又一段軽くて佑ふる ゆのまき 柏木

柏木

第柏印本能 柏木 柏葉 五葉あま 三葉の五葉

柏木

くまく 时の子親 不死席 和菴 かんこも

だん多 日 ヨシタ 原産 日 キリトモ 日 蝙蝠 日 うそち

唐乃葉角 日 させやくの葉の角とよばれハコとて

弯弓弓を弓とす 弯 矢弓 矢轍 仰詔書を一 日

拂接虫 日 蚊 蚊柱 蚊帳 蚊室あらわし 日

矢のふくろ一陣 矢のふくろ 矢のぬきよき

一夏の糸 雪 入俳 安居 形心耕種日安定期此住日安

行紀氏要覽ニ書く お行をり

五月 さき日見え月 さむ月 仲友 薩賓 皐日

予苗日と異一てさつまと云ア 律薩賓云あらう数月の名と云

加文茂の足摺 一日 装一あ射く 松本家 日 円日

新菖蒲 三月 苗の實 ちやくふくハ四月 左右の迎秋葉あらわ

六府其の二と申處の階の東面より入るをれてはくまく みゆ

内務司付早風 山樂の山中よりそまうと申と云松木

五月の序會 ちやくのうつ おめおれ 天子御法殿より御膳をうけて宣

令と行ふれ強尼子房を御すくく皆あやめのうとぞく興業アラム

おまえのつとえをとまつてすうとおとおとおと三事

端午乃節 桂五ともア 湖水ヒタのみ日とりふと 五月ハ

年の日へうて想半も云ア そもそも一のキヒツト

菖蒲 ふる根 菖蒲刀 菖蒲のやり ゆふ常 ゆふ陽 ゆふ風  
ちやかく 昆明の百草の菖蒲の根茎を病とすすめ故百草アリ

草又大祓礼日乞うよりふもとへゆす サ禁の言

予今事まで大祓礼日蘭湯の御みどりの湯の御ひでアリ  
逃てキヘイモアリモアリと申る日は汝ノアリものかアリモアリ  
モロヨリ御身之國ヨリモアリハ事時難犯シテアキテアキテ  
シモ根とアキモチモ色アキテ

クスダマ  
草王 五日の玉 五つまの玉 未令縛 縄下縛 碑火縛 僧達 五教絲

諸病五日よりながくまつまつと五日の糸を綱てひらふとハ

糸をもとよどむ事文代ニセ第四章

三ト今奉よ山草王と玉めす一ちやぢとこひすとせう

ナ自萬能を耶シタリ一程をさくまへあらとし矣

伊勢松代は侍るやああたまの御すらりけちくやまうまう  
カウケヒモアリモ是ぞソレアリハ俗也アリモ人々繕縫人々繕  
カヌヒ 五日と腰三日よ腰無縛アラサ子仕事候達とソレヒ  
ササギ 不自立モアリ 草木摘キソヒカリこれ百本摘ム  
ちあに あもせばアラサ子仕事 ウラハにあもせばアラサ子仕事  
ササギ あもせば角森 角林 錐襟 苞襟 穗鉈襟 れ子襟

ち草氏の名子五日め自子身ア院カラキ良水神と御て人をもと  
さり或人チタニモ多そ襟を一て海シヘ一ハ五丈の襟と御りハ  
久紳人をうちセ万古ヒトモアリハ又楚の屈原が汨羅を死ニモア  
シテモアリテ莫ちと云う事アササ吉多ノカノ仕事也アリ襟と

松色和テ茶ちと云う事アササ吉多ノカノ仕事也アリ襟と

うらうをうこーろへ角森カクモリみ子様うとのひかくすせまえれ表ヒラフくや

ケアラハ乃冒カトハ レイ蒙古の夷西國エシキョウをあそんでとさーくをふ

魏寧カイニンを跡ハタチに拂ハセりを吾ガの身ヒメを甲冑カツブを身ヒメに兵ヒサムを佩ハセへ旌旗カイを

そそけりとくわが軍カウを今後カミヘも甲冑カツブを身ヒメに兵ヒサムを佩ハセり

艾人カネニ 蕃人ホンス本支天師ホンシテンシをあく日ヒ

モ

モウコーはゆきよちやにうとひそ

人形ヒトヅルを修ハセて門戸モンヒの上ウエハにけりと艾人カネニも蕃人ホンスもアラ

天師テンシとそく形ハタチをあらわす人形ヒトヅルを修ハセうと門戸モンヒの上ウエハに

アラ我ガも陽生ヨウジンする形ハタチを修ハセうと門戸モンヒの上ウエハに

又天師テンシをあらわす人の形ヒトヅルを修ハセうと門戸モンヒの上ウエハに

族ツクシをうそそ素ハタチをまことま戸モンヒのあらわすとくもは事ハタチよ純シヌ

族ツクシをうそそ素ハタチをまことま戸モンヒのあらわすとくもは事ハタチよ純シヌ

伊人イヒ 艾虎カイをいそぐこれも唐カウより東ヒタチを修ハセう

忍豆カウシかとす一乘イチヨウの多タチの年ヒメと小虎コハカルを修ハセうとひそよけりと

頭カブよつてとくそ邪鬼ヤギを辟ハセうとひそよけりと

歲時記

彩圖カイング

と刺ハタチ 滴粉圖テッボン 水圖ミツ 白圖シロ

唐カウのま中ハタチは舊年カウニは粉圖

と修ハセて令堂カウダウの中ハタチは小角弓コウボウをもけて刺ハタチあらわせ

令堂カウダウと天室カウシムを事ハタチよる又水圖ミツを修ハセ白圖シロとあつけられ

五色カウシと一ハタチ人ヒト歎カウ慕カウうとの形ハタチを修ハセ滴粉圖テッボンとあつけられ

修ハセうとひそよけり

桃印カミン

付ハタチ 五日 赤靈カシレイ付ハタチ 日ヒ

タ

タカウとまきて屏風カウ几帳カウ扇カウとよあて無氣カウをやむとひそよけり

桃印カミン付ハタチ 又抱朴子カウボクシ符カウフ年カウニ赤靈カシレイ付ハタチとひそよけり

桃印カミン付ハタチ 又抱朴子カウボクシ符カウフ年カウニ赤靈カシレイ付ハタチとひそよけり

主カウシをたづねに元カウ陽カウキカウタカウの主カウシをちむとて修ハセ裏カウと

ちくよよもまきとう 菊楚年時記

雨湯をあふる 五日 立とて山中もさる大祓礼

あうことなせろ舊山の湯のかくらー

ケリ  
糸の美こ 糸のあらわし本丸

湯年よ糸の糸を面すり錆へる漢史アアム

鶴鷺の舌と去 麦陵化よ鶴鷺を切てみ日立こもさの尖を

さとへらへれあつたあらわるる鶴鷺とよとく本丸

競渡 龍車 水馬 駿渡とハ舟と河を渡るを速を

すく五原五月五日は相原を況て多々人見を以て舟楫を

をとどとを救アツミテアガテ今日競渡のめぐみれと

後まようちをよめ方勢軍の人へ舟を車といひ楫と馬と云ひ

舟を危車水馬といひふと 本丸

騎射

馬弓 章中行をす合云 五月五日卒年次をむ一ノウテ

侍覺きよとこ歎をもさうといふと

左近のまよあい

右をあら陽のまよあい六日ともびひをうの

日といひこじかたをああくよしひやのまよあい五月の左を

あよあい六日はたとああくよしひやのまよあい五月の左を

まよあいをうの日といひこじかたをああくよしひやのまよ

あい正月うねはとひやうとりふとひよし馬と木もいた近づき場

そろよおうとひよし木と木の木と木の木と木の木と木の木

地 仰せ諸事よきよ壇の小豆を拾てりんちとある

うの猪射うかうかうかうか

辯水 河平年時雨竹より下る水也 辛巳

かまびの義也 五月から九月まであらむる 未だ多かとて左あす  
アリてちくへあらむる 声をゆれ林百の木あらずとて辯  
百を空き

ちかうの切、さみ 五月俗人櫻花を取ておひをみてて墨  
白を避すに代れ本草よみと拾ひ松よみと桜よみと櫻の  
手をひくふみ自み自よあひともかくと云うと云うと  
片栗やみ鳴辛よ桜花を取るべて作つ今もんかあと  
つみうちよ

薺、葵、桑、柳、菖蒲、梅、松、柏、柏子を累々天平と云  
さけの後 而練籠楊氏は河平年正月をちく練ていは後く幸文

宇治祭 旭八日さんびとつぶすをりひもとてゆう

今、ま、木、九、日、今、ナ、み、月、紫、壁、よ、と、さ、う、松、と、つ、不、知、び、

室の山神祭 旭十二日

山神祭 月十三日近江坂本山

角、三、日、廿、五、日、貞、因、云、村、上、て、ま、の、は、國、忌、と、ハ、ま、す、り  
は、忌、日、を、ア、ル、そ、名、日、と、云、日、太、内、よ、改、ラ、一、又、志、利、あれ、行、ア  
キ、モ、ク、シ、ム、チ、ト、ヒ、ル、ホ、ノ、

宗勝寺

東大寺典祕寺延暦寺周塙ちゆうのたすあ傍の中

鷲古の字をかうをえりて經師とそら拂玉經を法華殿  
うて種をうそそり うそそり草よほ緋の序とつぶすをも

此より一年中行車テ今すと日のいとくらこれ

賀給

老の娘一歳子承姓とを継ぐて家中の條、坐小説をも

檢非直以爲之をいへ。

住吉の山田植

ハ八月

梅雨

日同日

山田の山田宿

日

芒種の節

日

夏至の日

ひつま雨

日

梅雨

徽雨

日

墮葉花火

日

伴の風

日

五月の芳

日

二の壬

の日より梅雨とひよー 辛苦細用より又苦梅雨ともひよー

虎の園の雨

日

大八月廿日落雨成らるる日ともあら虎虎も

無佛寺へ行ふまほはをかくわき

弘園のう寒洗

日三月

半夏生 五月の十九日土日とも自入まほの五倍の廿日

まほのれを不食といア

蟬め初まう 月令より至の第十九日

月出そむ

嘗め生を入 例自令より反舌をまうと年ノ於事ノ訓嘗

まくらめ川

日

薺の川

日

薺を川

日

和布を川

日

葦の川

日

葦を川

日

而合

日

船の合

日

船を合

日

筆寫鶯

日

筆写鶯

日

朱摘毛

日

朱摘毛

日

高たるみの女

日

萱草

日

負脚

日

豪毛

日

下野乃

日

乞昌

日

人乞銀

日

人乞銀

日

射束日

日

射束日

日

射束日

日

射束日

日

後益子日

日

後益子日

日

後益子日

日

後益子日

日

蚊帳

日

六月

二十九日 水待月 三十日 雨、五月 林鍾 旦日 初日

陽水 水立一月としよへとおもひれへとこゝスヘ五月入林ー早苗ア  
おうまくいとむづくと自室お山自体林往くとるなみせーと  
鐘づきよ風うて此そよのよと訓ふはまくらに考レシム

氷室

一日 氷室の時朝

氷のあ 氷水も 氷室のあ

氷室のあ

氷後行水 貞信云 氷室の氷へ四日一日起九日をまで放すと極もレ

とも六日一日をわゆと取扱ひと見てお定ム

予今素子四月 う外もよりへ延志式未水亦よんと熱日うちハ  
き脇も氷を用ひをひかキのとづくしほ氏常々のまゝも氷も  
やをり侍フ ふ秋葉う氷室山をく様をもとまつりもとア又  
氷室のちもましは水の世信へ山經を 氷を准へて朝日す用侍フ

忌月の時教を供モ 一日忌月とく不津の大を打トヨリモヤ

自此作を食鳥使仕事を今日より侍トモトモー内膳司々とておつ怪を  
大底子の時教を供モトニ奉

在酒 こしきお乃ナケ他 ひよとくまじけ造れいあまく供モトニ有ラフ  
貞信云職のあやうむ)お乃ナケともとくに五方ナハもまく六月一日  
六月令 皆 侍義大師の忌月ちとハ延暦寺にて行幸勅使立 章

侍御の侍ト 十日 御旅立お主お玉体コロフミちくさんを占ヒ  
奉まくおうア 云奉

月次ノ友ア 十月 土自モソコレハ六月土百あ左諸社へ時教モ  
をまくを候ハリ 云奉

中今食

同日

この日年はあたへ停船を待たせを妙傳アシカシテ天子

もうう付饅を付セシムをねとくニキ

ケサイ

解齋の膳粥

十二日付今食の次の朝あはきの大床にて其盤一脚を

六度付先に鶴赤さ土器と和布の掛けをうなぐニロ食て津

者をうそと云申

祖國書 七日旧融虎天延二年六月六日助平ヒリノ者の京ち延在御使へ

経社主文天皇モムクノ宣傳モとめり七日の金キタ内ノ秀吉公乃

時々の出来事松本は旅所の近在あり

長刀をと

滝谷りし玉堂をひそ事く候えこととづひらむ

白ほと

鷦鷯と人形棚ふをもと

第みや鉢

氨基酸といふ如く筋肉校人形の若相景を費長房をよそうて

重陽すまよのりうてあゆくと 放下鉢 やうま人形アリ

舟底

神功皇后は殘良干珠添珠をそろつて三韓を討ほへ候ふ傳也

岩戸山

旧在紀神代のモロホアミカヘ天地いまとコトハナツ御モロホア

辛夷のモロヒラヒラモロモロの圓のうちもあらを流一も体うどアリ

ウラダ  
白山

神功皇后三韓を討ほへ候ふ松浦川エ物を船移候不候(日章紀)ア

孟宗山

其靈考のき井子筈坪アリモモロ山とも

郭巨山

日父母山也 琴ヶ破山 荘永の裁速破琴ヘ成ル伯牙漏絃

鷗鷺山

立車ノむく方候く

白樂天山

道林禪師秦の望山の松の上に車をも窠和尚とアリ樂天

行て向左を一

諸惡莫仇善奉行の傳をつべ候し

衣子山

至唐寺天王も良材をひよは山へて杉の木子取まつ儀と耕

行ひ一休之松の跡すの山角也。元亨アサニ左

木賊翁山

そぞれあふ山の木の名もくじれぬ秋の夜の月とよみす

テのきわうす

芦翁山

かねぬるふるうておーうりうとくうううう

うめのうまみあゆ

ハキミうとくうううう

高僧人山

生不不詳をかみハヤリすすきとくアヌアヌアヌハ

梅原山

梅をかく一休とも

山休山

天神山ニ笠杵ニ

十四日

七日ニ清旅へ出候小休興をす日祇事あ幸社へニ一休アモ

榜舞翠山

美姫祀ちう一舞山於門の三級ニ舞ア登ニ侍く

萬ノ子山

幸姫御子ニ之活念然の荷井津妙二來は仰とて頭ア

ホウマツノ坂ホーリ仰ふらえおんとくとくとく山の名

黒主

克シ序ニ承のほすをまくうトドクモ又五行極トモ云

役行者山

大峯もて役のうそく小角鬼神をほくしハシカモ

乾麻山

生而不詳をもとて立やとづ小鬼をほくしハシカモ

本院子幹也アリをもとをほくしハシカモ

鷹巣山

立石乃傳く松かいも人形あれハ松かく山ともア

欽鳥山

舟かと七日の舟をと大と日一むくハ林中トナフ馬長

うとつとさくと一船をとすハチ多モアリモ此度をそそ

又長下とりすのへほむよアトカロアト一船をきて天王の所下

ヘー山をこうとみに仰アセアトカロアト一船をきて天王の所下

テノハ殿武小令人乃威儀強ゆ少供奉うととく又わらう山かこの

。武塔天神より疫病の神とておこなひ紙をいきさりをあらじ年以天王井

姫くちりひ女とす一所へ八大王ゐる田に祭のひよれさう  
津高山祭 例十五日身をそぞ走桃竹とせむらとて尾張國に

熱田祭 例十五日瀬道起すまみあがめえとくとく  
熱田祭 例十五日瀬道起すまみあがめえとくとく

いく一月冬日十五日 竹生山祭 例日

江戸の山王祭 例十五日太田と灌丈中子はたよ山王現を効得と  
相國寺のちんや 例十七日鎌門と松原と二銚鉢を吟ぐ  
祇園祭例月祭十五日勅使うち東教をせうと林代のハセの里とふ  
东村のえくもまみのりと 二事

かほく 例十六日 嘉慶天民 例 菩薩三種 例

世継四月吉日奉主より本院うちを彼護祐子嘉慶通宝と仰りて  
大勝とりふまきととを表記すとくと季吟云今のちアハト  
さるしのうきものをまの浅とてくわ又采一升六合お拂うりあと  
伊勢乃原小札 例十六七月かほくとくとく

鶴多々祭 例十六七月先前 志波山祭 例 十七日讚昂

彦久山祭 例 十九日 父士指 例 一日立アハ月主とくとく 父士主

笛土二月とくとく空音とせむラシタラシテウノ日  
笛土二月とくとく空音とせむラシタラシテウノ日

鞍馬山祭 例六月先前 天儀て神侍役 例 廿五日是天儀

橘志水 例 五日丹後天 優天儀て神侍役 例 廿五日是天儀

金佐佐志子准て古経とくとく 大坂府摩尼祭 例廿二日

かほく江月乃納 例三十日 仁者所役 例 四日

事記卷之四

四

ちむにあをとすをもつてかくがのはよは

まううは候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて  
そそは候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて  
がとうはい候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて候りて  
やくすあうきあるのを度をうも水と日と日と

候りて

第折 ヨラリ 今日竹主より候ひのすはもうてを行ふ折あてと

うきとあくと第折の余ぬ竹までありてはうけの  
まほとまうすきつもてうきとせばを勧る事と  
大般 本日は候川主へ來てタゞく候事もあらへ  
あらすまくへ前へ西上りて朱雀門より出で船を一候事と

見ゆる舟をうちとおもひてあらすまくとも

アリ麻の葉をまくとて候うり放麻を候事と

形代 ヨロシ は候まよへ形をみてておの岩経をうへて川より流す事と

ことをうそ 築方候 先生天王侯民將事すな候つまは

瘦病をすん時侯民が集まつておの心をうかがひ候

うかがんとのこまく候ふ今も候うり築方の心を取るべ

支神示

川社 二社も玄武川急子棚をうみて神を祭る事と

社中竹子等へえ神示付と

小壇 うみ神

真御云壇の事と云ひ多めうみと山と山と人

神もおうみてきがまくと云ひて候うりと候うりと候うりと候うりと候うりと

精火祭

六日ト候事へ火をあてま城の壁の角にてをすと火を

ふとんあととみる

道徳

日日四角燈のまつりう

四十一

こゝもト教氏の人都の四方から、思魅ら化方ぐるをまじめに  
のさんじよ路と子供相をもへてまつとし四角燈の祭だ。

施

施 東山西山中の山あへよもよは仰きまくまほをもむけう

ほくらむるこゑ

雷

雷の陣 雷のえくをちくらむ

大將軍下近海の波舟までタクを第一ては船の旅宿と候一て帝を

ちきよーすまゆ

西まよふ三月の夜は船りうとてふる船屋とも

た日の郊やう

小暑の節 六月三日

温風 月令

彥母づくいをわす小 日

大暑の節 六月十日

腐草営とちる 月令

溽暑

ぬくま日

夕立 月令 大雨時行とどり 七月一日

天貺

天貺 節 六日 宋真宗祥符四年七月一日とて六月六日を天貺節と

セノ言故事

三伏

夏至後廿二三の庚の日を初伏といひ中宵

庚を中伏といひ立秋の後末庚の日を末伏といひもを二伏といふと  
まへて竹の金こ夏至十一陰生ても大盛うち付多きといひ今乳伏  
くろくす伏とへつとて書言 秦の財より休祠を修すと盡業を  
防ぐと休日よまつて一夕を後寝の時に休日よま鬼行にて終日  
宅を用くると之とて本文

土用干 申 年虫拂ひ扇 扇車

扇車 旅日麻車八月圓扇日布圓

汗拭紙

汗拭紙

簾 竹簾 竹簾人 脚馬 たまわくろく竹簾人

蓬うち竹收竹毎ハ竹の名前をひま或ひ足をひきせぢとて涼一

蓬うち竹收竹毎ハ竹の名前をひま或ひ足をひきせぢとて涼一

あらわしの風　山谷詩より　脚注もおうへんじ

涼　自涼一高涼一真涼云警鴨ちと水も涼一とひき納涼とも

又涼とよともり　遙暑とも

風 篠

南薰六月より涼風　三日自南風と古文苑集より

そひの音　夏至多奇聲　陌樹明詩　真涼云六日照日の時　すずめの音

ちよまのやうるせう　りくと泉水　清涼　真涼云清水をくまむ

らう一再　音涼音をうへる　あらわし西風　將涼はれい

嚮

つらう　あらわふと　他今をうそとよせ　を刻す西山のひきゆを

本院は東山の甚しき　とハ大根くとく　先年を後すまくして半も

癡句うとおりに於一　うむう一　御子職人をす令すうらふと乃う

うむうとむう　判の詞うれしまを賣ぢく　者の詞うはすゆ

れきハるかくとくかくをこううくとくひ又みうてんとあらまう

つううううう　一先祖傳うねじうへりう

支切の景

他

川鶴

日

梅

日

林檎

日

早桃

日

サ

楊梅

日

杏

日

林檎

日

百日紅

日

桜子

日

梅

日

杏

日

百日紅

日

辛夷吳昌之竹

蓮

荷葉

他

芭蕉

日

白蘋

日

具

一

うき

秋

日

芭蕉

日

海木公

日

うき

日

芭蕉

日

秋

日

芭蕉

日

海木公

日

うき

日

芭蕉

日

秋

日

芭蕉

日

芭蕉

日

芭蕉

日

秋

日

芭蕉

日

芭蕉

日

芭蕉

日

秋

日

芭蕉

日

眼皮

日

芭蕉

日

芭蕉

日

秋

日

芭蕉

日

きづく草 俗

しりのふ 司

射干 日

一枝うちかす 日

紫藤 日

青尼竹 日

麻

梅麻ふの邊すむと 交引の糸

交引の糸

支芋がもへ化

支芋日 仕は芋日 麻を刈へましニ毒めいれ

交も秋うら

香薷散

香薷とひうら

蒜の根

瓦

瓦瓦かられ 俗 水瓦 日 瓦瓦日 茄瓦 日 胡瓦 日 姑瓦 日

夕彦

ひまごの花 俗 紫瓦 日 干瓦むく日

豆血み毛

俗

小角三

ホリヒモツ内 俗 ひうらとあくとよのひうら

蟬

うつせみ セアガタ 俗 せみの日 さみのさみ

夏虫

さなごとくとびじて蟬く大とうむーといふともあう

蝉 うつせみ

バハ 虹

秋の障

表秋 おも

雉 白藏 星天 金高 田景 爪籜

をこかへし月 日

七月

ふしき ふしき 文ひうけ月 益王 七夕日 月

涼月 五秋 初秋

夷則 金秋 相月

さくと文をくじるもひす文ひうけ日とも

立秋

立秋 けさ秋 秋の初秋 肢秋

餓鳥

朝日

立秋

けさ秋 秋の初秋 肢秋

餓鳥

朝日

立秋

立秋の日をひそくくそろそく立秋の日都は樹葉をそぎをぶて

せな女子のうそくうどにかく立秋の形を切ちて立秋の日をひそくく

樹葉をそぐくも秋うら 一葉ひそくの舟 一葉に桐くち言

柳

柳

楊柳

楊柳

俗

接待

接待日 番をはまの人よかへむるくひ祭の日されひをひまし

比野

比野水

日

六日 社ひのまことにひせ日

日

七夕

きみのひわきいとすのひにけくまつ月せんづらひ

星合 星合 星子に向 星め契 織女仙

牛女

日 河鼓

月

きみのひに日二つ三星

集年、星合の夜は

かみ

あまうみとせ文日本紀 三ノ一書

ちの川 銀河 銀浪 銀漢 星河 星合ち夜は星を守る

年は夜。一年は一を天の川をほりて年よ守る

まむく舟 まこ一舟 星合のとほり舟とも万葉に在

からよの橋 きよよのくわ橋とも万葉の橋といふもかう

みとみ鐵女へ天帝のもよせり一河西の集年牛

あさむれいて後拂をすをくに父もすとくか一河西天帝

いそて牛とらけて天向をねむてき方一かて十月七日

まよをゆ一秋の付鳥羽は橋をぼくと鐵女とくわ

まよを葉さう欲又川うどく舟よて原のふやまよめかくわ

又ふくろんとまよの時ふ原を橋よくまよとくわあ橋といふとくわ

又てふくろんとまよの舟も

二十里の金形

秋の木 夏は木の木と胡桃木立木寒浪底無温と候はる

色 キツカクテ

色アソビテ

秋乃糸 木を琴、一丸糸

木より木より木より木より木より木より木より木より木

木より木より木より木より木より木より木より木より木

草の茎うを管絃調と半呂半律一調りをくして草の茎うを

草の茎うを管絃調と半呂半律一調りをくして草の茎うを

あらう日野の魚川の水を牢の納まることといたりたる

牢の主は寺とすとあることとて一とせつ一つをもて二つをもて

アリとす も巧手 と云ひてよめんやがれのまゝの

まもるてよみゆし 荊楚歳時記

七箇日也 星もこもよちのくらみ水をみて波をつけて水を

握る事 幸のまわぬ病 他 これが中国の物語ナラハシ うちの故をもゆ

幸のまわぬ病を伏て瀧て握る事と云ふ事

七日の清節 由舊古今これを謂毛をもゆる

素絆 むすち幸の小子と有る事とて人を瘧

病をもゆきとて者幸のまわぬ病をもゆく事とて人を瘧

病をもゆきとて者幸のまわぬ病をもゆく事とて人を瘧

素絆と引く事はもむかへ西渓雨 七日毛をもゆる事と本  
本清川跡かは持る 他 七日毛をもゆてまわぬ病をもゆく事  
毛をもゆる事とテ

日

素絆と引く事はもむかへ西渓雨 七日毛をもゆる事と本

文

延万年八月本山へ用山へ八月文殊院 八月本山へ用山へ行

之をもゆ 経九日連にちあゆてむ一晩と冥途へ是に往ておられ

うやく冥途のそとつて死冥宮の故人をして持つてゆく

桔突の いとおとく生て死生てきておもつまぶつておれ

清水寺六日宿 経十日 中元日 十五日も中元節とも

孟蘭盆 うえええ 七日施祭鬼 日暮の母縁懸の本とて念する

事とおもひ併うるをもゆる事とて十五日酉戌五葉を酒八十方の

佛の供養をうち私へお詫び言ひやう)あると因縁を傳ふましく  
佛弟子の奉仕をこなすものへあつて、わんをうを一とつと佛  
大法とのまづれをもつてゐるといふとハ哉とぞ) 麦稭至經

玉あつ) 望天棚 佛 棚經 日立立秋 日枝まみ 日枝まみ日根芋日  
まつたと月立立秋日凡ちまみの日麻くのそ一日

うき人のせきまみ金ゆく い年よ六年のべー報恩經よアミマト  
中よも七日ハテシヤムヨタケハ一ノナキアリ侍りを経すも十五日く  
地店の船人の若無とがふまむ想ひトとて士此日石經をも詰め  
修めをさうゆうじて諸大不吉をも生アリて諸事の多くも  
本きくふぐ一奉文教裏と報恩經とい本音の手の附ひをもつて  
十六日の午時より下り一侍り

墓多カ(細) て身ゆ失禮の墓多高アフリモシリムヒトニモ唐も  
七月十五日光祖墳の塚かくぶをそは高山供奉のうち毛善華漏(ス  
サウハ)五日 おみ祭日 千般日 坐多と文少もう人には少内も少  
少ひゆつ又少とももまみ飯千般ちとお拂うことせらつまのりと  
灯籠 竹竿も古きうごうか舟もろは舟もろは舟も竹竿日  
新竹竿日 梵中ももはうううや) お市門改玉をゆづ

かけ躍 仰小町をく) 内 まきをく) 日 おきをく) 日  
三城ちく女(細) 蒜 十五日 売い世人もうてほ今日ハテシヤリ(ねク)傳エシ

送火 ゆす火日 施火まき日 かのと大日 おうおと大文字松木傳ハ謝法  
八幡安永頭 十五日立の十二月十五日 形心釋抄是安要期住是居と

解 夏采 漸布信奉多日無事。亦未つまて極詫異端。りと  
欽氏要覽。又ハ吉祥。あくまう。

水引采後。もと真金。もと新羅。あくまう。もと高麗。

緒のす。又或候。もと新羅。もと高麗のうちも。もと

也。秀采。也。高麗。もと新羅。もと高麗の行。あくまう。仲。

もと高麗が。眞金。もと新羅。もと高麗の山狩り。御財のす。じわ。仰ぎ。也。

鶴原

。眞金。もと新羅の山狩り。仰ぎ。也。仰ぎ。也。

は高麗の。ほ。止。十八日。八所の。山。も。其。經。ゆ。ま。

相撲。と。力。伎。刀。茶。童。相撲。そ。り。せ。ま。み。れ。

也。鶴原の。俗。は。人。を。や。一。か。つ。り。て。七。月。二。相。撲。の。年。と。ひ。て。天。子。乃。

也。鶴原。も。と。も。相。撲。の。年。と。ひ。て。天。子。乃。

也。鶴原。も。と。も。相。撲。の。年。と。ひ。て。天。子。乃。

也。一。か。つ。り。て。七。月。二。相。撲。の。年。と。ひ。て。天。子。乃。

霧。秀。采。青。の。芭。胸。の。き。芳。主。人。三。方。山。日。も。ま。う。も。く。

緒。嘉。く。よ。と。仰。仰。

ある。裏。と。仰。

神。嵐。角。玉。角。玉。

ひ。づ。く。爽。氣。

府。か。

國。麻。か。

木。槿。

自。令。さ。ま。し。下。延。不。好。

草。毛。

妙。彦。素。牛。參。仰。

也。も。と。く。一。如。帝。花。も。ん。れ。一。仰。

矣。高。小。薪。を。あ。の。薪。焚。御。森。の。薪。焚。御。あ。う。薪。日。

也。薪。焚。御。あ。う。薪。日。

萩殿 萩の戸 禁や萩ちりふと清風殿の北より

萩まつ方 窓の一本も又お紫と咲て細毛もとて別らう も葉蕉

小車の笠 ひきうちう 月 桔梗 ちうのむすび 大豆草 月

萩 うどかき 萩うへれ眞はあいせあはあへやのうづうれい縦らう

桔梗をむきへかねし 下萩 新緑の萩

かくとうがふ 仙 さくらー 木のあづま月をこらへてはせでままで

ふ白一神ゆかみをとまれのふはとふすすちう

まみれ草 月 橋 はしだとてまむらう

ゆふとゆうけ

仙衣草 月 緑草 紫師草 月

アキラサウ

月 まみれ草

秋萬草 月 秋万草 うわせ 亂却草 月 うわせき草

おうれく 月 菊玉 うぶすなあめ 一秋萬草は似てむらう

もみじの草 月 やつまむは ちとまあ 月 茶の英 うぶ

クサギ

月

木の実 月

木の実

月

蜀漆 月

蜀漆

月

梶 ひき 月 早田

室のむき草 月

室のむき草

月

月

みる草

月

蝶

月

カタツムリ

月

カタツムリ

月

カタツムリ

月

月

かの子

月

木の実

月

知れずの又事とぞと云ふが爲れ候る事又主  
つらむ。つらむ。田虫かく。繩シイナ。處暑節。自中。

宿毛と營月令。多至半弯。弯山別。

妙弯。或八月。

妙色榜。

日 身勝之とよの弯をうそつこと

妙弯とも妙色榜ともいふ。身勝之の弯と云ひねりと云ひて

身勝之とて御承取の妙色榜と身勝之の妙色榜と云ひて

夜あらゆるもえり。妙弯とぞと云ふ。

鷗吹。神事。妙山鷗。秋乃うらめし。人情のまことに。身勝之と

身勝之のまことに。身勝之のまことに。身勝之と云ひて妙色榜と云ひて妙色榜と云ひて

身勝之。仰天日。妙色榜。

八月。うき。秋節。自。鑿。自。又。日。仲秋。南呂。壯日。中律。

雜月。あせす。くまく。殺祭月。と。身。勅旨。八月の律。

八月。みの行ハセ。例エガイ。經行エガイ。寒。

後嵯峨の帝。天喜。天喜。比。天喜。と。身。勅。うん。と。身。勅。の。く。

帝。天喜。よ。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。

内。く。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。

天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。天喜。

白雲。歸。八月の節。天中節。八月一日。天中乃節赤口。

当日生氣の方の本をさうて薬をすまひ。八月一日天中乃節赤口。

白舌。陰陽滅。とまるて門三神と云。大瓶。瑠璃瓶。瓶口左の口を生氣。

カトトロホシガサヌケムモヤヒテ

水村祭 他 一日二日 墓のち奉り 墓天神祭 他 三日四日

七野祭

四日五日六日七日墓参候ト休日午後て松杞と並て供よけす

白聲の御帳

五日山門の傍カラて車を行と

十六日

十三日

十四日

十五日

十六日

十三日

十四日

十五日

十六日

十七日

十八日

十九日

二十日

まほとく東宮の六位已上の人を立て靈輦行路を擇て祭事と  
おもむく司呂とりふう

いそるをとくらむ

放生会 他 十五日

元正之宣を告ひ西十九日是國を奪んとす大喜薩の  
計カラニテ敵を退て後勢をわくの入を教さし放生会と行  
へよし一教會をうち改め年禁國子ても此よりとく坐薙田若

貞節之故の川を多殺も差し極川とぞく人材予あはれ

阿野津の八幡祭 十日 伊佐祭

志賀八幡八月 一日

吉野祭 トヨラ 一日 長門 宇佐祭 トヨラ 一日

宇佐祭 トヨラ 一日

名日 無名日 二十九日 他 墓正日 韓昌黎詩月乃空

傳抄をうつ 他 朝日

傳抄をうつ 他 朝日

月のけや トモハセキ

小金月

在度とつよナ五

度とと自とつよシ三日 トモハセキ 十六日トモハセキ 月 うちまづ日 ナナヨリ

居候ノ日十八夜 やまちか自トモハセキ おおさ りのう うちまづ

自うみま 日本紀 上弦下弦のいとをうどりとく

自の舟これ木舟とくとく 木のくと 体舟をす 木の舟

木の舟

木の舟

玉巻 日 玄月 日 中ユハ足の毛をくらア 目の桂 日 玉鑑

月中子ニ生の蟬アトニテ 売城紫城 これ仙人あらう仙茶を  
ウマシテ月中よかモトモアレ給れとありの名ももらう  
自の極みアリ月中ユ西寧の村アリと西寧難題アリテ まう  
極男 吳剛とシ仙人月中毛アモト極方とシテ  
自の事他 或人元ノ為のてこうとまあ極くまうアキアリ白毫玉  
氣事アリてすまの根をくらうアリ是ヨウラウは度世算二月内乃  
うアリテ死ぬまでユヒタマトモアリ

日の釈他 三月うちアリテアリトモアリトシテ

其の言 もの老の地アリテアリトモアリトシテ 五月亥申 他  
廿五夜の五夜中 四月廿四日めの火事アリシ日アリトモアリ

星日辰 夕見度 玉の光 夕附日双星 以自夜

廿五日辰祭 十六日 五条坊門町アリモアリ梅殿と云ふ天神乃  
は所の跡也 約束 約束へ全月の約 立方承の約

仕事の物約束の者ハナム自らアリと承諾序アリ國忌アリテアリ  
ケトヘを代ナム自も仕柱アリ約束てあるとつづりナセ日アリ  
甲斐國始祖の傳承とひきりて其の井 藤岡小町アリサムアリ仕合  
國忌自の伝承は八日アリ上野國の傳承をいふ事アリ近江式多

清靈祭 他

十八日

八所とい 宗道天皇を祀行清子早良御主 伊太保王

伊太保王

朱衣夫婦李 蓼衣夫人付戴玉山女 葵大丈 カガモ桂 橋大丈 送勢

文大丈 文公文鬼 火雷天神 吉並相 吉備智姫 以ハの靈と伴と  
ツカレシ此卷アリトモアリトモアリトモアリトモアリ

ツカレシ此卷アリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリ

此祭ニ王の鼻とす地のことをいへば田春らへ一ツ木鼻まゝ

辛一日本紀アリ

来之祭

紀十八日

後ノ社祭也

金火

秋之の辛

八月廿四日

御み祭

唐糸祭

在活林の祭

紀十三日

チノ音ハ西主八日ナキテモトナシ

古形歎ノ時断獄刑法を

主ム五刑を行ひテ死罪の考の追者ナキテモトと職原村の村

ナク 褐遠一役ニイチハヤトモト

釋奠 上下日 先師并十哲を祭りテ二日ノ同一

秋社 秋之のあはく近主より五穀の神を奉る日ヘ王者五々の土を  
封ヘ社とて修モ遠と禹貞の後ニモトナシ

新田祭 貞由云秋の土を捧持モ送化の神ニ

秋のま 中子の事也 但ニ自子乞ふ

革無谷 稊

木犀乃木 日 葡萄 日 棚ツ えひう

束ニ 稊

芋ほの家園 茄根ニ 家門

芋

菖蒲 えび 素戔毛モモモモ一束ニ薦 尾名 亥翁東毛

束

刈 番 竜う引拂 菖蒲モサ鑑

朱紫

壇 牧

志モモサ 素戔毛モモモモ

自家

高至紀志未日

茅の木村

花壇 稊

野菊 日

揭仙毛 日

鷺人日

金剛日

縷み日

鷺人日

金剛日

縷み日

鷺人日

金剛日

縷み日

鷺人日

金剛日

縷み日

五年五月一候かかづの事とは、すれどかかづの事はあくまでも

ひきびき

次桔梗他

うつす年

日

カモウロ

日

ちげび

日

蘋の葉

日

黄香の糸

日

かく風

日

かく風

日

牛房いく

日

草

日

かく風

日

奪す やすらかる かづ はい船 落船

下り巣 崩巣 垂 させき まくら 小男床 床笠 麻杓 日

書

五采毛麻の巣毛 サ桂 ざけ ば桂 日 每人は桂とひて秋の  
季ちうとひて是に桂をすらまつたるを以て又秋桂也

スギ  
鶴ほり 鶴毛毛 小鶴引 ひこづらも秋也

跡も 暴れ八百は吹大風也 サウハ 首落コモリモリ

田をち 田タツク田を荷 猫禁 ねこ禁 八束船

船蓬 良國云蓬をまするよ船の面のキムシを船ふと又ねこと田を  
いれむとひきぬけむあつとひきぬけぬて掛ぬまにテムカムハ  
いなむ川を柳とそらもやく柳のうらまくうる船蓬アマ

案山子 ちがい さくら ト板 うろこ

かくひきむとくの人形もぼうの海水と水きて水きて裂けてみの  
ちくを縛てもをじと麻かくとこ引板ト板よ本とそつて絶  
引てらまきとのしゆまくとのてのひのひしかーとくまつひうり乃ゆ  
うるとも云實の山田もくもくと傍船もくとてこも近づけまくも  
かくの人形とらむと左手もくらすかやくあれい左へ別の  
お之先年石川太山きく門かふをうづを傍りて文字  
を教ふを小船堂をもとて昂よ兩こ一タクアリ昂仰說よ  
仰て名約一もすうくれと一

九月 占日 五日 壬午 小男川日 直光日 桟の秋 季候

立村 立月 葉月 亂 ま秋 宅秋

七十五

西の日も日もう少しに七月とひつて本家の秋といふがさうのあつた  
又家の秋といつて木深山ともひつて木深山の秋といつて木深山  
スハキ村ともひつて

唐紅 二月二日のごとく北野の灯をそそぎまつる

不堪田委 七月金の若園の田の換亡へつらひを因縁としてせきひ  
セリとよつきて相殺を免へねがひりうつる

桂宮相撲 八月さうのまつたまの北野の田の換の第一町之松井

水漏ち冬を引す 一日三度入眠一晩不寢速疾毎日を要てには  
アーテクツモ尋達天遣て取之へくるを全利うどひアハナツキ小  
糸を今ちあつて終日あつませ仕づ

重陽、宜

重九菊酒茱萸の農 菊花より宜 美能

あくまうけ

氣のきせ紹 カハ陽の秋く九月の九日うれいきれをま船をひつて  
ヤハナケヌ翁の揮蘋端ノ文作アリキアリは櫻の花も茱萸乃  
囊をしきはあらじ氣瓶とおとと御座と御車と御車をほふるひととふと  
毛をき陽の宣とおとと御車と御車をほふるひととふと  
弓を引ひ茱萸の箭をうしるべ貴長房のやもの桓景の弓  
をまくしキ文 又もひ茱萸の房をわて頭すくませにあらひと  
ゆきもとまくとひよりむ地土をひつて 後走ぬ事まつまわる  
か背ひのき處のひひ身肉こうるはくはくややのうひ物をひと  
そもあらひぬをあくまうてあくまうてあくまうてあくまうて

又あくまうてあくまうてあくまうてあくまうてあくまうてあくまうて

弟としておもふぢまゝよきおを防ぐとあらじとも思ひり世新  
きふ栗をとどもきみうきうておきを防ぐとあらじとも思ひり世新  
かへけりす第新新おもむくことでのほくや

醍醐祭九日終也 法善寺祭 国日伏見之神功祭御を祝う

鞍馬祭四日 貴布祢祭四日 生主四日 大坂

山宮祭十四日 下毛野祭十四日 皆能也

例幣 土日体地木立は幣木立をもとめく毎年の事事とちうて例幣

といひしるす泥湯泥湯を委ま吉田吉田も仮幣役也

儀式相撲會 十二月於器

住吉の市四日 宝の市とりこれ

神輿神輿をまつて神宝供奉神宝をうつうはま宝幢を  
そと倚みとて神神をまわすまわす神神を笑笑まも竹竹)

白河祭

仙同日

後の六日

大名日仙

栗名日仙

ふとその日 日の出出、未未と西西の日日うち

天玉天玉一糸糸十十日日十五十五日日北山

小糸糸祭祭日日をあ

勤学勤学三月三月から

築田築田に祭祭日日内内

仙

四日、夜白川橋の東八大天王天王の家家で御宴牛牛以以て至至め

婆智度婆智度天王のむちも頬頬梨梨をうそうそてうそうそてうそうそてうそうそハ王王よよこれ曆曆

うそうそハ將將神神天王天王大歲大歲神神麿王天王大將軍大將軍俱度俱度天王天王太陰太陰神

得連得連神神天王天王歲歲刑刑神神良良將將天王天王歲歲破破神神侍侍神神相相天王天王歲歲殺殺神神宅宅神神相相天王天王

黄櫞黄櫞神神蛇毒蛇毒鬼鬼鷹尾鷹尾以上以上晴晴泊泊藍蓋藍蓋内内傳傳、委委

大宮祭大宮日日内内

神田神田明神明神日日内内

三井ナメ

四日四日未未去去、れ桓桓

天官天官日日内内

神田神田明神明神日日内内

三井ナメ

四日四日未未去去、れ桓桓

恩情

相

同日东山

山口紫

日中己午固防

中十七

呉服祭  
ハ日赤子を也アヘナモ  
はの國也アホク  
疾神と它的也ナ所納使主を呉國アツモエサをもとめ經ナシ  
是媛姫媛呉織穴織四人の女をもあリキアフ呉織ヘ縫業内貿形  
大神ニマナノミニサヘ津の國アツモアリ墨年紀アホクカナ穴織を  
あヤスヒトシテスルアリ

婆利女祭  
廿日ち近室町アホクアキナナ日アホクアリモ牛比  
チウル日とキアリ  
牛年牛社傍盡氣氣アリム六牛社体奔走モ  
サルモとそんじとアシギリ此社アリモタニタニ  
アリヤとアリヨリ事又ナラ松毛毛アリモアリハ死ハサケテ  
ツクモ一ツモアリサア前日ち人ぬひも紫氣アリモセ

アリタヌサ  
アリタヌサ  
殿モアホアホアリモ傳アリモナシモアリモアリモ  
山所アリモアリモ傳アリモ傳アリモナシモアリモアリモ  
荒地アリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモ  
故ニモナシモアリモ傳アリモ傳アリモ傳アリモ傳アリモ  
笠場所アリモアリモアリモ傳アリモ傳アリモ傳アリモ傳アリモ  
三井をめアリモアリモアリモ傳アリモ傳アリモ傳アリモ傳アリモ  
アリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモ  
繁昌アリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモ  
秀吉太閤此社を東山佐用牛の八幡宮の侯ニ  
アリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモ  
佐用牛アリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモ

そくうに答へかといふをとどめよ。傳へてくまう。

冬

エビス

旅夷祭

同日

建仁寺門前

西ノ宋の

洋中より風浪ありて舟車を危うくせばくつきて山夷を

舟中よりこれ吾船の蛭子海神の事なり。神し祀はの難

らす。また舟と車にて傍へちへり於て船と通じて通航にて

せす。又あむきりをもひよて波沙の旅人甚はの難うまくを

八幡花乃以

トウカ

古日佐木

株車の余

10日上ちむ竹田

トウカ

牛祭

トウカ

朱雀

シカタニ

谷

古日

連發祭

同日

北山祭

古日

トウカ

福王社

トウカ

本号歩蔬作

水室

吉綱

トウカ

木幡祭

古日

トウカ

福王社祭七八月本号歩蔬作水室吉綱

鳴游祭

同日

津村

古月

津園

年中行事合

撰虫蠅

同日

津村

古月

津園

年中行事合

聲文別

同日

津村

古月

津園

年中行事合

山皇祭

同日

津村

古月

津園

年中行事合

七日そりとおいてちかくがたきてこそ、そりひよててらるく

そりひよててせうゆう経りて、奥國大極川のうち後も秋をす

とすも四年のうちナカツキの秋の日模一ねぐらす

吉善祭

同日

津村

古月

津園

年中行事合

秋の月

西の月と云ひても、西の月と云ひ秋の月

菊

百合

白菊

能

狂言

大白日

醉楊柳

同日

女蕊 隐君子 てう桑

社中竹ニ桑和葉ニ桑和の事也

桑と桑葉を

桑と桑葉を取る事もアリ。但傳と云ふ事もアリ。而以  
桑和葉と云ふ事もアリ。

秋の桑 十月の桑葉の枝と桑葉を洗ひてえ林し

九月小神 加 素うすのナシ

霜降節 九月中 カタツムリを取る月今

み葉 みえ葉 まちうらう うつう 川の紫川の紫叶をむすびて樹

皮うるそといても

梅の葉

梅の葉

木本木本葉を落しても

柏

柏

名木木木葉を落しても

柏の葉

柏

冬之松 やまとの大松 柿のみ葉

いとう 日 醉杏

木の葉 枝の葉 桑葉 桑葉

桑葉

桑葉

桑葉

桑葉

椎

椎葉 楊川面等は椎葉を多め出でたり。其が事と云ふ事と

御身とも眞法<sup>ハシマフ</sup>と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

アヘ椎勿傷秋之

柿

柿

柿

柿

柿

木子

松子

似

棕の日

さくら日

さくら日

せんじんの実

椿

シコ

たもの日

あめの日

あめの日

木の本

聖山の木

聖山の木

聖山の木

聖山の木

緑の林

緜繡の林

うつ林

眞海木

木の木

蟲の木

仙蓼

仙蓼

木枯

花枯

木枯

墨水草

老ぬ草

老ぬ草

老ぬ草

老ぬ草

老ぬ草

あわいく

あわいく

あわいく

あわいく

あわいく

松毒

松毒

松毒

松毒

松毒

新月

新月

新月

新月

新月

尾羽の鳴

尾羽の鳴

尾羽の鳴

尾羽の鳴

尾羽の鳴

离时雨

离时雨

离时雨

离时雨

离时雨

新緑

中秋

中秋

中秋

中秋

中秋

佳音乃神道

佳音乃神道

佳音乃神道

佳音乃神道

佳音乃神道

多 元英 金羅 上天 玄帝 伴檀文達 翅音

十月 うれつよ 時年月 神安月 小春 沙モ 玉モ 陽月 惠陰

上多 暮要 良日 左竹 玄毛 桐木 奉正 泰の世の平日とも

廿日を神吉とひ葉典弓宿一かよ日うれいやも又四方のあ未  
あまを此日とせしとれ日と人ちりとあわづらや一又強神事より  
太往へり終へりとア世精回音又朝林泉焚松火一天下の神を日  
を以ておもひて神吉とモ神日ともやて吾社乃法神より  
肇ノ終不致とみあた姫事云け月絶淫のゆと月端もま  
引をきくがはよ陽日とふと 又亥日は陽神のちと月と  
ワカミト神吉と名付と云ふと御名をもあいと云

齋釋ハ十日の供入歳時起手を喰らひあり其のとく故小春とモとア

多衣 翔日 交秋の生米をそめ生糸をあくすりとく

孟冬の旬 一日 天官面西坐拂きて祭主を二鉢の後攻魚を禡ふ

拾あ竹と主扇寮炭をそであづりとをうこつりもか炭を進む  
神医 一日 健神歩くとあまくとこうくも

鴛糟コウラフを食 一日 ちろこ一は前楚め人食之半支

進物炭 煖炉含 そいもあつと一は十日一日す有司煖炉炭を

多民間もんぬきとくとくて煖炉をもとと若葉泥をも

拜墳 そももうちこ一はナ月朔日於の供人墳よりうて客供

ウ禁牛ももて牛すて陸よ頭す生莖革縄よアスケシウ

亥子の縄 フジシナウ は嚴重 成は玄猪 十月立日供を食ひれ

義高と改めて 綱景院集より

御絢をなすに相続とまことひ松原よゆう山内巣室

らうをうる絢の御歎をうつてうもぬきしてうもんくは

弓弓子とそそをゆうとせめのうとせめのうとせめのう

立冬節 十月の音

冬音

冬音

射場始 一月 たちの鳴り場の期をつくらすと射場蓬と年中

行車のう令すと天子弓場を出でてうをは笑と云御

以下束革一と毛を射る天子は射事と志うて弓矢を唐

立のたをうそうる三事相原

馬菊の宵

同日

射道詩をひて弓を彌下り至陽の日

三日

達磨の忌 同日

五日

十夜の念诵

同日

六日

七日

無縫ち法無令

六日 九月廿日

七日

のちあ田半とて妙法の

大吉と定むるは十月六日大忌大肉廢の忌日之内廢

は子を嗣ぐそへ給うそテモテ

維摩三玄

十四日 そいす日から十六日まで七日無縫ちとて維摩經

三縛さるナ六日大織冠の忌日うちねりより

金比羅堂

上日賛送よし 法華海

三日

日暮と上人忌日

下元 日 有ナウムアリ

水宮解厄

厄

正月上元より天官福を瑞ふ七月十九日地官厄を赦モ十日

下元より水官厄を赦モ又水官主厄而同人

間の禍福を去れと天神トて厄を解モ

間の禍福を去れと天神トて厄を解モ

山取二一

日

東福寺園山景

十六日

石之因師忌日也正天祐の五日をとどまれば比の真之

夷舞 大日高祭終り 大社神事 中美日 神集 出重

神の益生 神延ノリヤマ 小也祭コニヒマツ 十日中之

往勝ち大糸立カツル 古留日カクル 七八日まで五ヶ日ゆるカサ

燒用

火焚き日 園物奉日 加火日 火桶日 相火桶日 埋火

菜の口切

初时雨

時々お祭タマシマツ 夜时雨ヨクシマツ 神のトモ

川もぬ時雨 松根の付タマシマツ

初立ハタハタ おの移シマツ おの歎シマツ 素柱スヅカラ

春の風 日のあ 青女シマツ 木枯シマツ 木枯シマツ 韶シマツ ひても

爲葉 あ葉シマツ あ葉シマツ 枯葉

柳シマツ

み葉シマツ 落葉シマツ 落葉シマツ 捨シマツ 新木 木の様

桔野シマツ 亂 桔子シマツ 亂 桔子シマツ 亂 桔子シマツ

落葉シマツ 葉桔子シマツ 昌桔子シマツ 亂桔子シマツ 亂桔子シマツ

此把シマツ 亂

葉シマツ 亂

山茶花シマツ

日 薩摩集シマツ 小さの岸

梅の冷シマツ がくシマツ 亂

日 亂牡丹シマツ 亂八重シマツ 亂花シマツ

キウイ果シマツ 亂

小豆シマツ

莢莢菜シマツ

莢莢行シマツ 蕎麦シマツ 川シマツ

麦シマツ 月

砂シマツ

砂官シマツ

砂冰シマツ 月令

鐘冰シマツ

山中シマツ 亂

山中シマツ

山中シマツ

細代シマツ 事シマツ 木シマツ 亂シマツ

沙魚

ひをみ役

大和シマツ 亂

千魚

村魚シマツ 亂魚シマツ 亂魚シマツ 亂魚シマツ

又は鰐シマツ 乱鰐シマツ 亂鰐シマツ 亂鰐シマツ

ふトづけ

魚をうさんとて水ヰ玉巻シマツ 亂水ヰ玉巻シマツ 亂水ヰ玉巻シマツ

朱の字日本紀子かシマツ

水魚シマツ 亂魚シマツ 亂魚シマツ 亂魚シマツ

鷺 さきのふま方 鷺の沓 は 鷺 カモダカ

鷺 カモダカ 鷺 ダカ

夜與り ヨコリ

鷺 あらのむくき 鷺 カモ

鷺 カモ 鷺 ダカ

水着龜のすこ

生海藻 は 鰐 カモ

鰐 カモ

鰐 カモ 鰐 ダカ

炭竈 カミガニ

炭 カミ 竈 ガニ

委炭のね は 小野炭 は 田炭 は 岩炭 は まくア炭 は 楠炭 は 岩炭 は

熟炭 カモ 羊球カモ とりふ老熟の形 カモ 熟炭 カモ てゆをあくや破ゆる カモ 胡麻葉

綿 カモ たうひ カモ 純うつ カモ そとく カモ よとつむ カモ 延繩 カモ 純うつ カモ

紙子 カモ 紙子 カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ

食 カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ

紙子 カモ 紙子 カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ

浪雨 カモ 入浪 カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ

吉年 カモ 吉年 カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ

十一日 カモ 壱月 カモ 壱月 カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ

天正月 カモ 周の世 カモ 大月 カモ 二月 カモ とく カモ 月 カモ まくア カモ

ウラ カモ 箕縄 カモ 十一日 カモ 律 カモ

曆奏 カモ 一日 カモ 大月 カモ 一陽 カモ 一月 カモ まくア カモ まくア カモ

今月中勢者 カモ 天子 カモ まくア カモ とく カモ 月 カモ まくア カモ まくア カモ

翔月 カモ 三月 カモ 土月 カモ 翔月 カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ

すそ カモ とく カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ

旬 カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ

一陽乃嘉 カモ 即 カモ 十日 カモ 亥陽の日 カモ まくア カモ まくア カモ まくア カモ

孝經の後よりかひと義を一ハ後櫻の如クニハ陽氣ナリテ  
カニニハ日南行と云シテ故ニキミトリム 住月と

住日を以ルモ陽氣アリム

宮縮キウサクと休ノク

晋體の母の比支けよのいとまちをて日ノケを  
える子を生むの後アリ日ノヨモギ一縦を添ヒ第時起よアリ

四方の學徒モキタのホーリケツの小屋アリ

禪ジンと教タチツ

襍ゼラをアリテ生つるもアリテスルキアリ日人乃  
娘メイドのああきつを舅姑ヨウグアリテ夫婦アリテ長至ロウジを政マサニアリ

崔浩サイホウ女孫メイジンアリ

赤豆粥アツキノシラフ 共工氏の子を食ふうせアリテ、夜忌ヨクキトウレアリ赤小豆アカシダト  
おでこをぬくをあゆ日あゆめ粥シラフをアリテ食をアリテ、瓶楚歲ボウツイ

絆ハタキを用アリキ

相嘗祭アヘンハイ

上申日

大和佐志大神

宍師恩智ウツチ

三事

菖本鴨カモハシ 紀倫國キルコ

日前あみ神アミカミアムノク玄都カスヂをアケルハ、祭マツトマツ

宗優祭ムネカタ

日

御此ミツの胎形タヒガタ、社マツの祭マツ、氏人シジンを行ふともせ神カミハ天然テイタツ

モ神カミトモテトモテアムヒトヒト、御此ミツハ御此ミツアリ、附タタキモ神カミモアリトトアリ

移シテ田心姫タニヒメ 濑端織津姫セラリツヒメ

市杵等姬イチキ

アキラ

宇佐ウサ佐の明神アマミ市杵等姬イチキ

立藝タガキ崩ハラフアリ

山科祭サンコ 上巳日

平野祭ヒラノ 上申日

春日祭カスガ 四日

杜車祭トリカ 四日

高麻祭タカマ 四日

率川祭サツカ 上酉日

梅木祭メイキ 上巳日

南宗祭ミナミノマツ 四日

中山祭サンセン

四日

松尾祭マツオ

同日

大原社祭オハラ 中子日

固韓神祭クハム 中子日

中子日

吉田家 中中日 同吉家 日日 あくわうのあいあまことく体こうて

季とまかひ

五郎 中正月 懐基戒

そよ板屋六五郎の年へ五人そ事寧辰辰子て  
天子は覺えうちくもとぞ坐とひ坐より御て懷基よ出度ち  
以直衣持者をひてひ笛をやさり天子のそを天子持者をそまくす  
此時のかく一忙景みだれまをひれ辞あり

辰上の倒醉

寅月 朝詔すやうとこうひてとあえてれ辞をあせ

笛を

笛をこまかの陣をめぐら五郎の不ア向ふと

カリツカイ  
竹の仗

そハ五郎の不ア狂うんあみ立せの雄うとを云ル一は乃

チーを杖のはとひトシもをそよのけおとひア

吉田女は腰

午日 清涼殿よりては腰をきくおもとアヒ申ア

玉を空音をあはゆレバ一符天女あらかうてひの曲を奏一て五

ま社をくして年てあをうそ小もあがの始うるとあ年半行るあ会

吉田家

中正月

生家へ人の鬼鬼の難をまつとねまでお半日をうむ功程

カリツカイ  
五郎志麻波令ちう奉おこうとア そよ板屋

新嘗祭

中正月

れはか年の神祇を神玉すとせ祭はるそひりての粧

十二セム

豊日

大嘗會

中辰日

そハか年の神祇を神玉すとせ祭はるそひりての粧

まアとおじてそよおもさこへ一に下すも够ふねとおもとを行

因吉辰付の祭

中中日

是が延暦二年十一月十八日から一からて辰上の

休をそよるそめハ自は延暦寺の元院長樂寺まで高坐すと

かく殊ぢうそのひのすうとそようとそようとそ

かく度の祭

下酉日

北臺毛と先若の神樂鳥とまをと相

こうむるやくと御もとより南日もと山櫻山より奉事人つぐ  
伊或の店水の白一社の事とも供奉人ありてゆきまし  
まくらにては林木をせめかうと室を一わざせぬひて寛永元直  
十月十九日一十九と申す

東三輪 情林手ト印日松葉手ト 室林手

小忌衣 さとの社 山ちの社

ヒカゲ

日陰の東 カシの下 もとまつ

お車まきと林手の付くとまつは紫雲山口のみのまつうちと同

林手の付くまつ

林手

林手のまつ

所知女 庭篠 林手の曲のまつ

櫟

柏手 木立手 木立手

松並木 大刀をとひと片打 瑞峯草 こよみの山地より

マノ内ステと云フ カミノ林手ア

オホサハリ

大前諸

多入本経堂をさうそくさいも あらわの井手付口に生

小前諸

さゝ松前やひそり やくとしつき 細角 たあ まうと田

きうくを さくとこれうじんものう

千葉

早手 星 さくと さくと ゆふくろり

ユタテ 保ミ

給食先手

金頭手 手頭

高殿手

オホタケ

右林手もさうとも幸あれアリ 五里堂多葉抄をとれ季を待し

情火焼

花轎の音と神事の度たててくとくらと喜びうやとのばけ

子 おふり子

大馬鹿のやかとまつて二俣大根手と便（便）子竹の能

吹草祭

八月 脳髄のやかとまつて紙活の手アラとひよひよ

新玉津のやかとまつて

十三日 五条の南鳥丸のやかとまつてのこ信

後成の紀伊國玉津掌相神を御活一粒アリとも今在在アリキ

科多をもてつとされゆるふ津ぬ衣色紙とて和紙をもて

室山也

十二日

竺の辯

室山坊門屋川の車まで

行ひをもててせんは走りとよつとらゆ

大師縗

廿四日

これ天台教者大師の忌日て妙法華經を無縫を

玄義文を摩訶止觀を伝説する金剛をもてて報恩の縗を

おひゆゑ立あらむおとまうゆうとくむけゆ

古佛

廿二年

廿一日から八日まで親鸞上人の忌日はる本願寺で行かれ

セ信とおかーとひらうとち

清繁

廿七月

南岳志日乃秋よりし無事とこそまかんとつひつけ

三鷹の西市

中西月

往三國じ

宇喜藤繁

廿日

神奈

廿九日

吉安を六の宗味をもねきとまことにもむけ

吉安

廿一日

吉安を日吉の肌

吉安とい山中の吉の字もある化れのねへを併ひきよて汝が佛

行き生戸を布袋吉の所よしとされ吉うて仰るよりこ

吉安ゆきよれ他

三月

吉安を吉の所よしとされ吉の所よしとされ妻

あさきゆきよ

四月

吉安を吉の所よしとされ吉の所よしとされ妻

ゆ

五月

吉安を吉の所よしとされ吉の所よしとされ妻

氷

六月

吉安を吉の所よしとされ吉の所よしとされ妻

梅

七月

吉安を吉の所よしとされ吉の所よしとされ妻

水仙

八月

吉安を吉の所よしとされ吉の所よしとされ妻

狩

九月

吉安を吉の所よしとされ吉の所よしとされ妻

鷺

十月

吉安を吉の所よしとされ吉の所よしとされ妻

トダニ  
多き事もあらず や」 宗 総持寺 多くあらず

うらやま紀 寺近日 近ち村 日 繰へ日 和から日

妙錦 日 教日

石花 日

ひ日 あらすじ日 言水日

ひ日 あらすじ日 言水日

鳴笛子宗

北の鳥舟よりおゆき 岩面西首よりおゆき つめの紀

桜

こゑもはさとむねおとくね しおとす記

十二月

吉日 申初日 桃も日 え冬日 李も日 曜日

除日 大呂 松月紀 神月日 美蟾 輓墨大全

むうい法事と供立を行ひて五帝師ひらかちとイアとあらしく祭子  
神を日とツを差しておもとしりふらす 大呂ハ千百の神  
縁日のみだるみ記きり 翻年、寛月 美月

乙未節

日 世信人のひよる者そり日 ひよる

忌火の後

一日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

二日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

三日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

四日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

五日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

六日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

七日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

八日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

九日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

十日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

十一日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

十二日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

十三日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

十四日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

十五日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

十六日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

十七日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

忌火の後

十八日 亥月日

大神祭

上御月 四月日

土牛臺子の像を

下年日

寺人ノノのきくらうを徳つてを殿室よひひて

土牛臺子の像を

大年日

桂第等方の門よ活物師も

うち中央ともと侍り東西南北中央おほくそ方よ准するの土牛を  
 あらう。まや松屋よこれ疫病をほさんのかよとえどもよ  
 自令ニ季すみ自土牛を仰りてをとモ外をようとえども  
 まよふと土牛を仰り農具を門よおきて有司壇を仰りて  
 ありこれ農事よとくむじうるべ一差奉徳よ

前<sup>サキ</sup>の仰りきも十三日は仰きゆひ太神樂の後言をもあよをもと  
 えども一於寺出り前<sup>サキ</sup>の仰とい十階とて右ま事<sup>トシ</sup>所ちどり  
 ミテ八墓とて下の墓へ年の経て幣帛をもせむふり

## 署駄乃政 前玉に

内侍所の時神示 天子内侍和行幸ありは御主刀自祝仰りト  
 や奉る内侍のあよ主忍察懃を引て官人應考をとひ奉天乃  
 宿を二行と越て筆ひうすき御起もとづけて奉事のあうふ  
 ちとこうか松屋よ多神主テいあよ主祐手のむく天子御天乃  
 宿ナムアーノモナリ松屋御天子天鉢女命西本のうつを  
 うつと一日落をあまよつたうつひあひを天をとむ一升代乃正  
 すすむ一ありす

寂勝ちの灌頂 十五日 松屋の儀<sup>トシ</sup>と年齢延綱上人或<sup>トシ</sup>を神<sup>トシ</sup>トニ

祭

八日 腸八粥

五山とも又禁事よもととぞとも十二日

祭

八日都の諸たちよ法供をちよ七宝五味の粥を筋毛を脣へ齋<sup>ミツ</sup>  
 也<sup>ミツ</sup>

大傳ち用山忌

廿二日

お布ハタケ川カワの神事 暮ヒナタの辰タコ乃刻ノニメ

七十

神主サイクウハ行エムて來キルとシテ元日ヒルと神ミツクらクけスア  
主事シマツより終エムて 曙ヒルの夜ヤクニ作ム小祠ホミコをシラフ里リ人ヒト  
終エムをシラフるス行エム疫イク神ミツクをシラフ也スア 天王寺テントウジの  
云クは師シマツ終エムよせ樹ツツクシより宿スルて終エムの神ミツクあひて  
行エム疫イク神ミツクのシマツあひて やハ高タカを空スカイ終エムの神ミツクが近アガハりシマツ也ス  
アシマツもシマツそシマツは無シマツ經エク讀タマフ涌ハラフの功カクもシマツてシマツ神ミツク院イニシ落スル山サンもシマツれ  
詔カモハの眷属クモハとシマツつシマツ也ス

追ツメナ懺ミタマ晦ミタマ日ヒルおモヤモアモヤモアモチタ 遵ツメ懺ミタマ爆竹カツバ

大舍人オサム察鬼サクガイをシマツとシマツ陰陽索インヨウソウゑシマツをシマツ殿タクニの座シマツよシマツ御ミタマ

唐カタニもシマツ疫イク神ミツクをシマツ少シマツ依シマツ赤カタニ幘カタニ衣カタニ表カタニ而シマツ追ツメ懺ミタマ又シマツ爆竹カツバをシマツ書シマツ言カタニ  
節セチもシマツ三ミツ月ツキのシマツ日ヒルもシマツ又シマツてシマツ神ミツク一シマツ月ツキのシマツ日ヒルをシマツ  
又シマツてシマツ神ミツク名ミツク命ミツクもシマツ又シマツてシマツ神ミツク一シマツ月ツキのシマツ日ヒルをシマツ  
かカのシマツおモノシマツ體シマツをシマツあるシマツ神ミツクとシマツやシマツまシマツまシマツる時カタニ  
先シマツふシマツよシマツてシマツをシマツ求シマツてシマツ未シマツてシマツ發シマツすシマツ而シマツ後シマツ氣カタニをシマツいシマツまシマツる上シマツ終エム也ス又シマツ疫イク神ミツクをシマツおモレシマツんシマツあシマツよ  
こシマツきシマツをシマツくシマツとシマツをシマツ供シマツすシマツ而シマツ後シマツ疫イク神ミツクをシマツおモレシマツんシマツあシマツと  
曰シマツ曰シマツアシマツヌシマツアシマツシシマツ也ス  
幽シマツあシマツつシマツ ひシマツづシマツよシマツもシマツ

寶松ヒメノキ 終エムをシマツ金カネのシマツよシマツあシマツてシマツ病カタニらシマツもシマツ

候カタニ囊カタニ物カタニおモすシマツ事カタニのシマツ財カタニうシマツの裏カタニ立シマツ芭カタニ葉カタニ王カタニとシマツ二シマツ頭カタニのシマツ鬼カタニ

都下死生の事との是非に於て告あうと被ちあふ萬葉を以て

まみを打ててこれをもじり又も鼻とアレ人をくそんとする  
いふとひよとを門よりもむれのよーとつるる

要きよくすへすまよの相はしてかのうのうらじよまより  
本流らきよーらるーほ裏抄い傳わるまのことをとすり中了於  
きよくわせうだく用持あてえゆー

吉田大後 仙 美少夫竹久達秀之  
厄おと 厄もろい

小室箭 十百弓之  
かげよ當をくひ御の自令

大室箭 十百弓之  
鷲弓の御を自令

暁日 蝶奈 喜平 清祀

僕の世よハ此の日穂の子うへ辰の日晋の子よハ此の日月暁日と  
暁日

同里の勝の先祖を娶り端の百姓をもあゝ夏の子よハ此の日  
清祀とつひ國よハ蝶奈とひ漢よハ勝とひ勝の孫に孫に孫をうりて  
先祖を娶りねし又勝ハ孫として故直接のふく端の妻也万葉を食せ  
事あつてことを度きうね事文類要アキニ

年内立春 小猪モ、ると仙晦日の方も

陰和 畜の子 畜本 畜尾 畜年 大晦日仙 除革の事 流年

年うせ年

かみよ つとくよ ま人のくの辰とてかみよ  
松もくうしゆつせきをうま人のくの辰とてかみよこれ事の経り

かみよ かみよ 鞍馬経二十日の晴の午はあそて百一日午はす

あらまよ 岩川百日もとすかうううをうとねねうとねねうとねねうと

あれこちあらまよぬ日の西をまよひのううて裏をうとねねうとねねうと

門外のまゝあつたる　寒を障　寒と紛　寒に正　寒の

寒のまゝあつたる　寒のまゝあつたる

札をもみ　紙被縫のれを納る　もみづき　もみづき

衣をもみ　寒日のかす衣をもみ　ほだふうのまみ

年未こる　正月未こる　正月未こる

妹をもみ

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

妹をもみ

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

妹をもみ

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

星佛夷

日

日

日

日

日

日

日

星佛夷

日

日

日

日

日

日

日

早梅　も梅　脾梅　正月の梅　孟宗竹　筋蜀ち　玄竹の子

俳

右が季の詞也　すまたせゆけふらはひてうし記まとこと  
矣邦他郷のよきそ千葉のあひの付もむ又憲本も歌風雨裏  
きの是名ちといそ悉くかそ一あらはすま今半戒三半の  
其半のまわはるは二候のやのぢくともは園の付よほうぢ  
もうちきるもまれずにまた化やの三月勾曲の會帝欽の年  
ニコ南冽を感きちとの類を境異すよろざるひばつよ  
季とて若くもすすめをりとも多うより僅乎一隅が參て  
代の例と見てよしありとひく一席乎のよきとせんかのすり出  
まんよハ社中のまくすうておほへ一候すよ

神祇

神事 蔵訪祭 住處を申御の事に年中七十日<sup>ハシタ</sup>

祭の神 树神<sup>ツリノカミ</sup>れへまほくまれうたうと柏木<sup>カツラ</sup>木

梅乃木

彼女<sup>ハナメ</sup>引墓女 神<sup>カミ</sup>し年<sup>ハ</sup>いも

釋教

麻<sup>マ</sup>野<sup>ノ</sup>園<sup>イ</sup> 身<sup>身</sup>外<sup>外</sup>あみすと利<sup>ト</sup>いりう候<sup>ス</sup>うそ秋<sup>ハ</sup>う

妙法<sup>ミウハ</sup>巌<sup>イ</sup>

傍<sup>ハ</sup>えのあま<sup>アマ</sup>あびく

嚴<sup>ヨウ</sup>美<sup>ミ</sup>の役<sup>ハ</sup>

楊柳<sup>ヨウリ</sup>觀<sup>カミ</sup>

吉<sup>ヨシ</sup>山<sup>サン</sup>とハクモ難<sup>ハシタ</sup>と貞<sup>ツレ</sup>は後<sup>ハ</sup> 天<sup>テ</sup>空<sup>コ</sup>と青<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>と山<sup>ハ</sup>

天象

いわひ<sup>ハ</sup>つらうか<sup>ハ</sup>船<sup>ハ</sup>電<sup>キ</sup>とまう<sup>ハ</sup>と木<sup>ハ</sup>体<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>と橋<sup>ハ</sup>まもぬ<sup>ハ</sup>

初風

初風<sup>ハ</sup>吹<sup>ハ</sup>し秋風<sup>ハ</sup>新<sup>ハ</sup>

雷<sup>ハ</sup>和<sup>ハ</sup>まく<sup>ハ</sup>く風<sup>ハ</sup>

名所

和泉<sup>ハシマ</sup>國<sup>イ</sup>

放生<sup>ハシマ</sup>河<sup>ハ</sup>

放生<sup>ハシマ</sup>秋<sup>ハ</sup>

櫻川

桜<sup>ハシマ</sup>浦<sup>ハ</sup>

桺<sup>ハシマ</sup>水<sup>ハ</sup>

楊<sup>ハシマ</sup>都<sup>ハ</sup>

夏<sup>ハシマ</sup>月<sup>ハ</sup>

松<sup>ハシマ</sup>城<sup>ハ</sup>

身<sup>ハシマ</sup>處<sup>ハ</sup>無<sup>ハ</sup>難<sup>ハ</sup>

志<sup>ハシマ</sup>の山<sup>ハ</sup>越<sup>ハ</sup>

延川<sup>ハシマ</sup>首<sup>ハ</sup>首<sup>ハ</sup>六<sup>ハ</sup>萬<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>合<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>連<sup>ハ</sup>仰<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>

五<sup>ハシマ</sup>土<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>身<sup>ハシマ</sup>後<sup>ハ</sup>難<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>六<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>古<sup>ハシマ</sup>傘<sup>ハ</sup>委<sup>ハ</sup>

菜摘<sup>ハシマ</sup>川<sup>ハ</sup>

生<sup>ハシマ</sup>朝<sup>ハ</sup>

麻<sup>ハシマ</sup>を<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup> 廉<sup>ハシマ</sup>角<sup>ハ</sup>口<sup>ハ</sup>皮<sup>ハ</sup> 廉<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハ</sup>毛<sup>ハ</sup>革<sup>ハ</sup>

廉<sup>ハシマ</sup>手<sup>ハ</sup>毛<sup>ハ</sup>虫<sup>ハ</sup>

三<sup>ハシマ</sup>木<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>高<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハ</sup>六<sup>ハ</sup>脚<sup>ハ</sup> 柏<sup>ハシマ</sup>弓<sup>ハ</sup> 鳴<sup>ハシマ</sup>弓<sup>ハ</sup>

二<sup>ハシマ</sup>木<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>高<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハ</sup>六<sup>ハ</sup>脚<sup>ハ</sup> 柏<sup>ハシマ</sup>弓<sup>ハ</sup> 鳴<sup>ハシマ</sup>弓<sup>ハ</sup>

三<sup>ハシマ</sup>木<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>高<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハ</sup>六<sup>ハ</sup>脚<sup>ハ</sup> 柏<sup>ハシマ</sup>弓<sup>ハ</sup> 鳴<sup>ハシマ</sup>弓<sup>ハ</sup>

二<sup>ハシマ</sup>木<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>高<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハ</sup>六<sup>ハ</sup>脚<sup>ハ</sup> 柏<sup>ハシマ</sup>弓<sup>ハ</sup> 鳴<sup>ハシマ</sup>弓<sup>ハ</sup>

三<sup>ハシマ</sup>木<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>高<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハ</sup>六<sup>ハ</sup>脚<sup>ハ</sup> 柏<sup>ハシマ</sup>弓<sup>ハ</sup> 鳴<sup>ハシマ</sup>弓<sup>ハ</sup>

ツル  
弓の草 穗の菜 溪の都 香 貞由としやかの体に立ちつら

まひのだよれのひあくまくうにねくに難し 玉虫 貞由役難く

うんがう 貞由難く一往み秋し 秋津虫 日 わげうふ

蜻蜓 が一き 貞由難し 重雀モのぬ自モ尾巻芦モホのれ

黒牡丹 劍削牛を毛さうせ玉牡丹を松モ劍牛をうぶ牡丹とひア牛のす

千魚とま難く

### 植物

茶の葉 美味あるひうまうまくもうすうるやうさまくうにうれり草す

おおきうへてるくめうらうく林のふあぶらとうてぬむよ根年秋うへ

田簾 ひきのうく白糸ひまく

和布

藤

柳

棕

枝の木 利木の木 貞由とまともまくで難く

子草

筍鶴

さへ秋し

菜島

殘菜

つむへまく

毛豆茶

紫

竹芋

桜の木の枝

椿

ゑへちく

ももう あひき

檸の木

さき

きくい

くちう 木の葉 貞由え枝ときてうぬる体うへ難うへ

はくも うせざき 貞由え枯木をひづ難て唐の秋し

竹ア茶とま難く

青松

### 人物

赤拂毛 壬寅まくうらへ難し 夕鬱の上難く 宮蝶の毛

爲某ア主 まくうらへ 柳下惠

柳林和尚

義跡 貞由え人の名へ難く ふぐら 貞由役難く

まくこひ

苗裔

孫のうへ

藤の

毛もじ

梅町牛助と 貞祐と組く 銀座 併の事とさうの事とされ難く

食器

菓子ふき ふきふく

菜雜事 ナグワニ  
菜飯 菜汁

干菜

干かぶり

土生姜

いけ牛房

いけ栗

七色梅

梅干 いもとこども

煮柿

柿をもき柿をもとどくとさく

千歳

干瓢

千六根

干莖

山芋

山芋子

つゝ油そ そそ豆 ま豆

傳ぐ 復つまともひてす直めちくとまく

赤小豆粥

枝豆あれい本と

粟茶

ひえ まび あま

鑿糀

かくし

二三七合地のくらうる新

穀糀

二三七合地のくらうる新

糀茶

糀茶

雲霧餅

かくし

糀茶のう茶

糀茶

糀茶

糀茶

糀茶

菖蒲

麻の葉食

七箇うちま

燭面

舟内箱

蛸の梯羹

菖蒲

志のふき

貞祐

きみよ

系掛ふくん

云乃びうし

多田多

五五

ちく

行

姪惟子

さす

さす

さす

さす

さす

人事

さす

さす

さす

さす

さす

臼ぬま

貞祐六毫毛ちに就てひれせん

貞祐之糸

行

堅持

貞祐六毫毛

貞祐六毫毛

行

求子

貞祐六年季名とこと里草紙行ふとぞ難

行

根

貞祐六年季名とこと里草紙行ふとぞ難

行

行

行

行

唐會日月 生雀骨

卷之二

第會 夏國云雜之

在宋之程 柳文 柳子厚文集之

雜本

梅壺

真國云雜之

漆瓶今多色

柳營

柳營

柳榜

花臺

花臺

花臺

柳高那板

扇網

扇網

扇網

扇網

扇網

櫟相

櫟相

櫟相

櫟相

櫟相

櫟相

櫟相

櫟相

花臺

花臺

花臺

花臺

花臺

花臺

花臺

花臺

荔枝

荔枝

荔枝

荔枝

荔枝

荔枝

荔枝

荔枝

辛卯物候志年記等あ之事す壬寅年志學すありと申候不  
居候物候の候を申候此秋はうれしくて季をとどめとさすと申候す彼  
等も亦別りふ細考して季をと申候らうまくわづるハニテラヒに  
シテうきへ季をとどめとさすと申候一月をあへあら一月をあへ乃  
申候てもおとと申川の方をとどめと申候すれど季をとどめと申候乃  
申候にてうととへ申候一月をとどめと申候すれど季をとどめと申候と  
つ申候あつまつたがまと申候すと申候す先陣候ゑう二月乃申候  
うととへせくうと申候え連すと申候すれど季をとどめと申候す  
候得てあと申候すと申候え連すと申候すれど季をとどめと申候す  
うとと申候え連すと申候すれど季をとどめと申候す

兵上古の義を絶ひ能得へぬ人ふるを既すを以て是故に速めに云と  
シハキテ京極ノ事にて手の勞も毛骨悚かすが能得へと仰ふ  
シハテ御の京極ノ事にて物を本と申すて並まつやもあハた文は  
うるを申すがよからざりと申すて毛筆の筆位より用ひゆべて之れも  
新之難れども餘の何ばかり地文も正しくむられヌニモ筆道ハシ  
用ひて毛筆ハ能得乎かと速テユベて西毛ちくは能得ハシ  
王をあすかに能得乎かと速テユベて毛筆を用ひ或は墨紙をとふ  
手毛筆を用ひ能得乎かと速テユベて毛筆を留メ又馬に速テ  
能得乎かと速テユベと能得乎かと速テユベと能得乎かと速テ  
禁中之御内侍に居奉サセされても能得乎かと速テユベ

王をつけてウタヒテおもひ五音を口ひあけてシテシテ  
連能のまこと能得乎かと速テユベと能得乎かと速テ  
シテシテ毛筆をあと白一ノ紙をうるを能得乎かと  
居るを今手子改ても塗らひとも能得乎も生らひ  
あてて之の事毛筆を用ひ先づ手万をすり手のひとせうる屋上  
毛筆を山眉つと口ひとて連能の墨を燒ひおを焼ひ皮紙と水と  
油と一概に拂ひ去るをあまかんと能得乎のとくやロラケ  
やる所後よりアセて私の利口とて人とあらざんと能得乎に  
こゑをもとめて仰得を申ふ事也

執筆付端作

貞祐云連歌五十九と稱すと俳諧ハ  
多百韻外ノ俳すと稱すと連歌也之に端作をも  
俳諧之連歌と呼ぶモ正保三年三月十七日於花咲亭定これ妄想懷旧  
狂文名年ニ連歌等の如く而御事執筆ハ  
懷紙子俳諧之連歌と半けて名うを待つモ師院  
但文情ヨヘ他言め解物との方も少々ハチ用意一  
先名前の方ノアコ次をあつて喜び之を懐紙帝  
一毛のけをれて文書おもてを墨とすがまを序てお懐紙お  
何ともうもして筆を執て樂うと移つまじて  
暮ら出ではうう頃一と宗近の方を仰す一宗近

能詣之連欵としけど、又對又參すと詣して端作  
シテ、筆白名面を手て持へあらうて、も縛ねる  
事、上縛下解をひびて、解何と能詣連欵と手  
て、亦連欵のことをとても、うへても、こく  
並る字迹、圓うみて、下解はまくまで、姜書  
時、於懷古たるやうに、よもよもと、そぞり想の如  
執筆、うへゆき、もと、と、無行の人、あらゆる事の  
うゆき、ひきし、執筆するも、詰一て、端作  
參うまむ付て、呼へあらゆす、口詰も、懷舊之  
きが時、執筆、あらゆる事、またこそ、懷古を  
而て、憶回之能詣と手付て、參うる也、詰一て

書付て、呼へあらゆる、紀文多う、考の能詣も、之程  
痕川近若の折、首ゆうし、ハ太懐回の能詣乃  
く、うろ一、僕和の漢の折も、曰あらう元人毛  
歌を、うといて、立居しきりに、眠らに、うし、故  
やう半咲へ、一、能詣の二字、紀氏左呼、某、ううち  
経つよまうとハ、只言篇すかく、音せ又能詣と書  
ふ若也々

寛文三年

冬霜月冬至日

洛下  
季吟

東山日記

卷之三



安永三年卯午春正月再板

日本橋新右衛門町

戸倉屋喜兵衛

